

## 第2章 吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

### 1 調査の経過

吉田構内校舎の老朽化により、給水管改修の必要が生じた。この改修に伴い、正門から実験水田の西側を通り直角に折れ、大学本部の裏側にある農学部飼料園から大学会館前まで東西に横断する新たな給水管の埋設が計画された。工事は、給水管の埋設に必要な幅約50cm、深さ約1.0mの管路を掘削するというものであった。このうち実験水田西側と大学会館前は、盛り土部分及び既調査部分であるため、埋蔵文化財への支障はないものと判断された。しかし、給水管が東西に横断する農学部飼料園は、姫山の支脈が張り出した洪積段丘の西端に位置し、過去には山口大学吉田遺跡調査団の調査によって遺物の包含が認められ、第Ⅰ地区D区として重要視された地域であった<sup>1)</sup>。吉田遺跡調査団の調査以後も、埋蔵文化財資料館により周辺で調査が行われ、弥生時代から近世に及ぶ遺構・遺物が検出されている<sup>2)</sup>。特に、給水管埋設予定地の南側隣接地は、昭和59年度の排水管布設に先だつて発掘調査が行われ、弥生時代～中世にわたる多数の遺構・遺物の埋存が確認されている<sup>3)</sup>。この調査は今回の給水管埋設区間に平行しており、その遺物包含層及び遺構検出面の深度から、給水管の埋設が埋蔵文化財へ影響を与えるものと予想された。

これらのデータをもとに、埋蔵文化財資料館運営委員会では審議が執り行われ、調査が必要であるとの決定がなされた。これをうけ埋蔵文化財資料館では、平成5年9月7日から10月15日にかけて発掘調査を実施した。なお、本学では試掘調査を経て事前調査を行うのを常とするが、今回は幅の狭い管路部分掘削に伴う調査であることや、隣接地の調査から地下の状況が判明していたため、そく事前調査を行うこととした。調査は給水管がこの丘陵の等高線に直行するかのように東西に埋設されるため、これに従い長さ100.0m、幅1.0mの調査区を設定した。調査区は大学造成時の盛り土が厚く、丘陵が下がるにつれて厚さ1.0mを超える箇所があった。

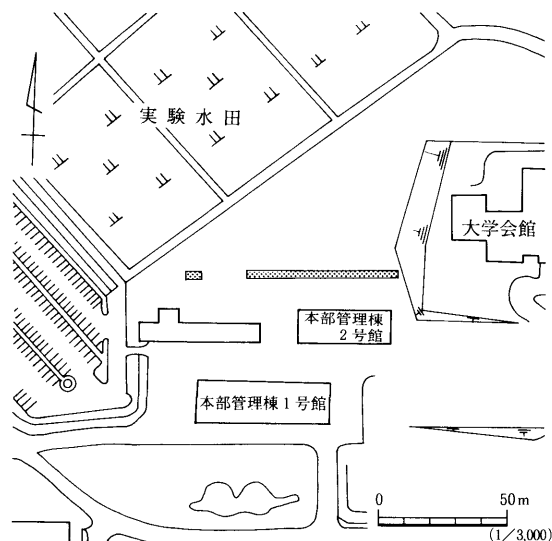


Fig. 4 調査区位置図

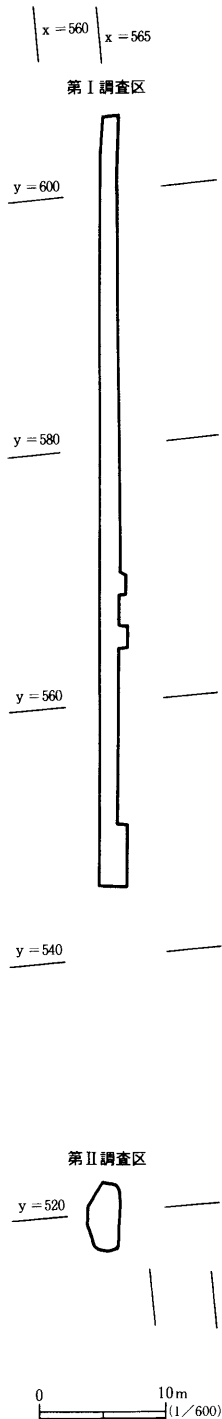


Fig. 5 調査区設定図

調査区の幅が狭く壁崩落の危険性が生じたため、調査区東端より約60.0mの地点で一旦表土掘削を打ち切り、ここまでを第Ⅰ調査区とした。そして、土層確認のため第Ⅰ調査区西端より西側に約20.0m離れた地点を、長さ5.0m、幅2.0mの規模で掘削したものを第Ⅱ調査区とした(Fig.5)。全体の調査面積は約70.0㎡である。

なお、第Ⅰ調査区は約60.0mと長く、調査区中央付近では段状に開墾され、上段と下段に2分されている。この上段と下段では、地山が異なり遺物包含層の状況も異なる。本報告では第Ⅰ調査区を上段部分と下段部分に分け、報告を行うこととする。

## 2 第Ⅰ調査区上段部分 (Fig.6, PL.2(2)・(3), 4(1)・(2), 5)

第Ⅰ地区上段部分における基本層序は、次の順である。

- 第Ⅰ層：褐灰色土（表土）
- 第Ⅱ層：埋め土
- 第Ⅲ層：灰色粘質土（旧耕土）
- 第Ⅳ層：褐色粘質土（遺物包含層Ⅰ）
- 第Ⅴ層：褐色粘質土（遺物包含層Ⅱ）
- 第Ⅵ層：橙色粘土（鳥栖ローム）
- 第Ⅶ層：浅黄色粘土（八女粘土）

調査区東端から y = 586m 付近までの地山は鳥栖ロームであり、それより西側は八女粘土となる。本調査区内において鳥栖ロームの堆積する部分は標高が高く、遺物包含層及び遺構は削平により残存していない。八女粘土は y = 581m 付近において急激に落込み、その上部にはにごった火山灰層が堆積していた。上面において遺物を含んでいたため、SX-01とした。SX-01は火山灰の再堆積層や、近世における盛り土の可能性もある。SX-01が近世の盛り土であるとするれば、その上面で検出された包含層については、流れ込みによる再堆積層として検討する余地がある。

調査区上段部分において遺構が検出できたのは、y = 584m 付近の柱穴群のみである。柱穴群のうち、Pit-04からは足鍋が出土している。

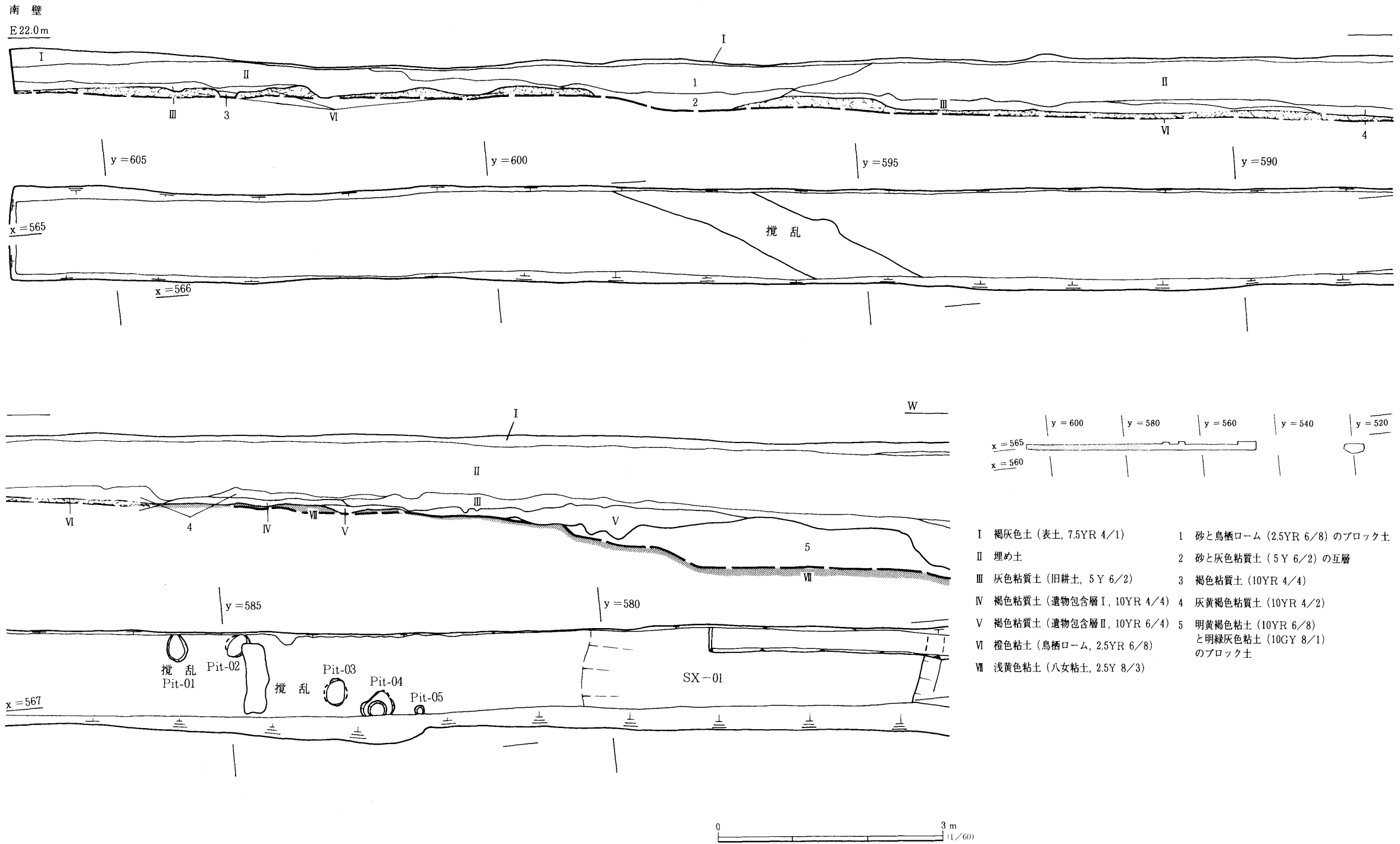


Fig. 6 第I調査区上段部分遺構配置図・南壁土層断面図

第I調査区上段部分

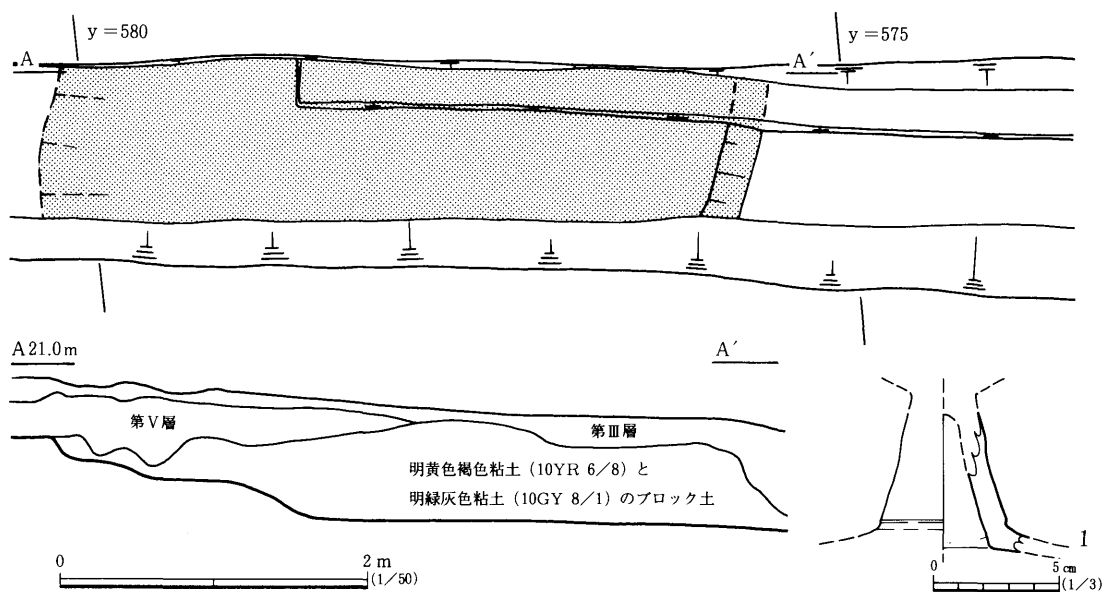


Fig. 7 SX-01実測図・出土遺物実測図

**SX-01** (Fig.7, PL.4(2))

上段部分の  $y = 581\text{m}$  付近から  $y = 579\text{m}$  にかけて、地山である八女粘土が標高約  $20.5\text{m}$  から標高約  $20.0\text{m}$  まで落込み、その上部にはにごった火山灰層が  $y = 576\text{m}$  付近の上段部分と下段部分の境となる段まで、約  $5.0\text{m}$  の範囲に堆積していた。上面から土師器高坏の脚部が出土したため、この地点をSX-01とし一部深掘りを行い土層の堆積状況を観察した。

SX-01は標高  $20.5\text{m}$  を遺構検出面とするが、 $y = 576\text{m}$  付近ではその上面が標高  $20.0\text{m}$  の地山面まで急激に落込み、段を形成する。埋土は明黄褐色粘土 (10YR 6/8) と明緑灰色粘土 (10GY 8/1) がブロック状に堆積している。土質は堅くしまっていた。土器が上面から出土してはいるもののSX-01は人為的なものではなく、火山灰の二次的堆積層の可能性が強い。ただし、段部分は近世の棚田耕作によるものであり、SX-01が段形成のために運ばれてきた客土である可能性も残されている。調査区幅が  $1.0\text{m}$  と狭いため、そのいずれかを判断することはできなかった。

**SX-01出土遺物** (Fig.7-1, PL.7(1))

1は土師器高坏の脚部である。円錐形の柱状部と、柱状部より強く屈曲する裾部をもつ。裾端部は欠失する。外面の柱状部と裾部の境には強いヨコナデが施され、凹線状にくぼんでいる。風化が激しいために、他の調整を観察することはできなかった。その形態的特徴から、古墳時代中期のものと考えられる。

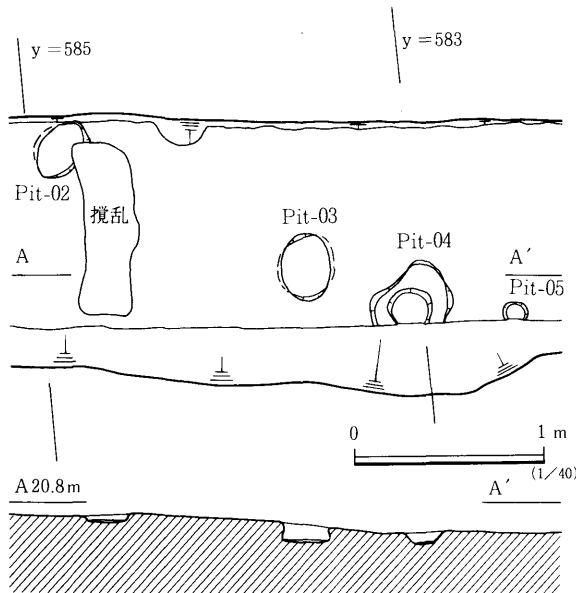


Fig. 8 柱穴群実測図

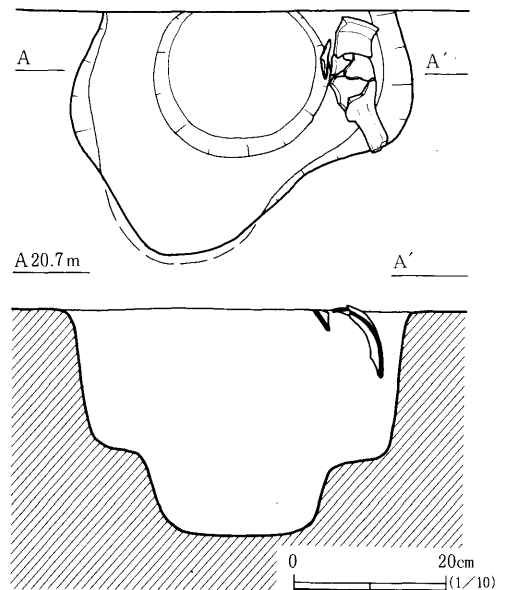


Fig. 9 Pit-04実測図

### 柱穴群 (Fig.8, PL.5)

上段部分からは、 $y = 582 \sim 585\text{m}$ 付近に集中して4基の柱穴が検出されている。八女粘土層の上面を遺構検出面とし、その標高は $20.6 \sim 20.7\text{m}$ である。いずれの柱穴も埋土は、暗褐色粘質土 (10YR 3/4) である。なお、Pit-01はPit-02を切った攪乱と埋土を同じくすることから、現代遺構と判断し柱穴群には加えなかった。

Pit-02は西側の一部に攪乱を受けるが、直径約 $30\text{cm}$ の柱穴である。側面がややオーバーハングし、底面の標高は $20.5\text{m}$ である。Pit-03は直径約 $30\text{cm}$ の柱穴である。側面がややオーバーハングし、底面の標高は $20.6\text{m}$ である。Pit-05は直径約 $10\text{cm}$ の柱穴である。底面の標高は $20.6\text{m}$ である。

### Pit-04 (Fig.9, PL.5(2)・(3)・(4))

Pit-04は、Pit-03とPit-05に挟まれるようにして検出された。その一部が北側の調査区外に張り出すが、全形を推測することは可能である。2段掘りの柱穴で、標高 $20.65\text{m}$ で検出された上段の平面形は短軸約 $30\text{cm}$ 、長軸約 $40\text{cm}$ の楕円形である。検出面から約 $20\text{cm}$ 程の深さに1段目の底面がある。この底面中央に、直径約 $20\text{cm}$ の円形の平面形を呈する2段目が掘りこまれる。2段目の底面の標高は $20.36\text{m}$ である。埋土は暗褐色粘質土 (10YR 3/4) であった。この柱穴の上面で、足鍋が検出された。足鍋は横にされた状態で埋没しており、柱穴検出時には破片の上端が露出していた。

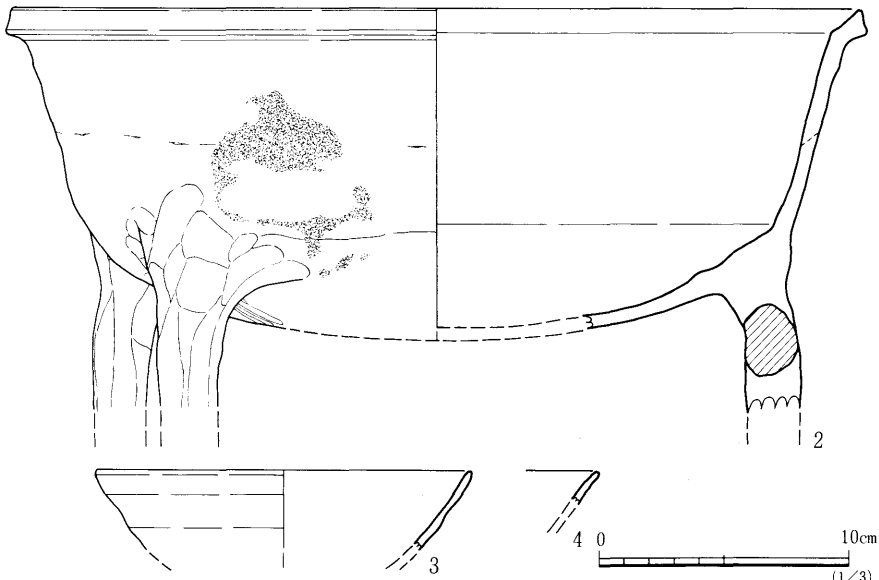


Fig. 10 Pit-04出土遺物実測図

**Pit-04出土遺物** (Fig.10-2・3・4, PL.7(2)・(3))

2は足鍋である。口縁部から胴部下半および1本の脚部が残存している。全体の約1/4の破片である。径のやや大きいボール状の胴部に、短く屈曲した口縁部をもつ。口縁部は肉厚でその端部は幅広い面をもち、上端をややつまみ出すことによって拡張している。底面から胴部へのかすかな変換点で、脚部を貼り付けている。脚部の貼付け位置に対応した胴部内面には、押さえによる指頭圧痕が残る。脚部は中程で欠損するため、脚端部の形状は不明である。

外面はナデによる最終調整を行うが、胴部の中位には接合痕を残している。また、底面はナデ調整の下にタタキ痕を確認することができる。タタキは格子目である。内面は横方向にナデ調整が行われ、条線を残す。脚部は「にぎりしめ」による指頭圧痕が明瞭に残る。胴部外面には吹きこぼれによる煤がぶ厚く付着する。底面及び脚部内側は、二次焼成により赤褐色を呈する。内面には焦げ付きは認められないが、底面があられている。その形態的特徴より、岩崎編年<sup>4)</sup>のⅡ型式のものと考えられる。

3・4は土師器碗である。3は風化による器面の剥落が激しいが、外面にはロクロ成形による凹凸を残す。口縁端部断面は、やや稜をもつ。4は破片がきわめて小さい。口縁部外面には、ヨコナデによる条線を残す。口縁端部断面は、やや稜をもつ。3・4ともに色調は白色を呈し、胎土は精製粘土を使用する。

第Ⅰ調査区上段部分遺物包含層出土遺物 (Fig.11-5~20, PL.8(1)・(2)、13)

5・6は瓦質土器の鍋の口縁部である。5は口縁部を外方に「く」の字状に短く屈曲させる。口縁部下端をつまみ強いヨコナデを施すため、下端は下方に突出する。また、上端も強いヨコナデが施されるため、上端が突出し口縁部内面はかすかにくぼむ。上端、下端に施されたヨコナデにより口縁端部は拡張され幅広い面をもつ。6は口縁部と胴部の境に施されたヨコナデが強いいため、頸部が凹線状にくぼむ。このヨコナデにより、口縁部は「く」の字状に強く屈曲する。口縁上端部は強いヨコナデによってつまみあげられる。5・6ともに胴部を欠くために、脚部の有無は不明である。口縁部の特徴から、5は岩崎編年のⅢ型式、6は岩崎編年のⅣ型式と考えられる。

7は瓦質土器のこね鉢の口縁部である。口縁部は粘土を外側に折り返し肥厚させる。このため外面の口縁部下には、明瞭な接合痕が残る。口縁外端部はヨコナデにより三角形に突出し、口縁部内端もまたヨコナデにより内側に突出する。風化が激しい。8は瓦質土器で粘土帯を口縁部内側に貼り付け肥厚させた、いわゆる防長型すり鉢である。口縁端部の上面は幅広く、その上面はヨコナデによって凹線状に2条のくぼみがある。内面の口縁接合痕より約1cm下に6条の卸目が確認できるが、破片のため卸目の単位をつかむことはできなかった。その特徴より、岩崎編年<sup>5)</sup>のⅢ期と考えられる。9は土師質土器のほうろくである。口縁端部を内側に折り返し、玉縁状にする。風化が激しい。外面には長軸1.5cm、短軸8mmもある大粒の種子圧痕をもつ。10は瓦質土器の底部である。小片のため器種は不明であるが、内面が使用により光沢をもつことから、こね鉢とも考えられる。底部側面は凹凸が激しい。11は土師器皿の底部と考えられる。底面はややくぼみ、立ち上がりは直立気味である。12~14は足鍋の脚部である。いずれも風化が激しく、端部を欠く。外面には「にぎりしめ」による指頭圧痕を多数残す。

15は伊万里製の青磁碗と考えられる口縁部の破片である。白色の素地に、やや青みがかった釉薬がかけられる。17世紀後半のものか。16は小破片のため器種及び年代は不明な青磁である。灰白色の素地にやや緑色の釉薬がかけられる。中世の輸入陶磁器か。17は陶器の底部であるが、小破片のため器種及び産地、年代は不明である。破片への施釉は認められない。18は土鍋の底部である。内面には鉄釉が掛けられる。復元底径は6.2cm。18世紀末と考えられる。19は大鉢である。外面は口縁部より約1cmほど下に、白土を帯状に配し、その部分に櫛刷毛目による波状文を施す。内面は口縁端部と、口縁部より約2cmほど下に白土を帯状に配する。内外面には木灰による緑色の釉が施されるが、外面下半部は露胎で

第I調査区上段部分

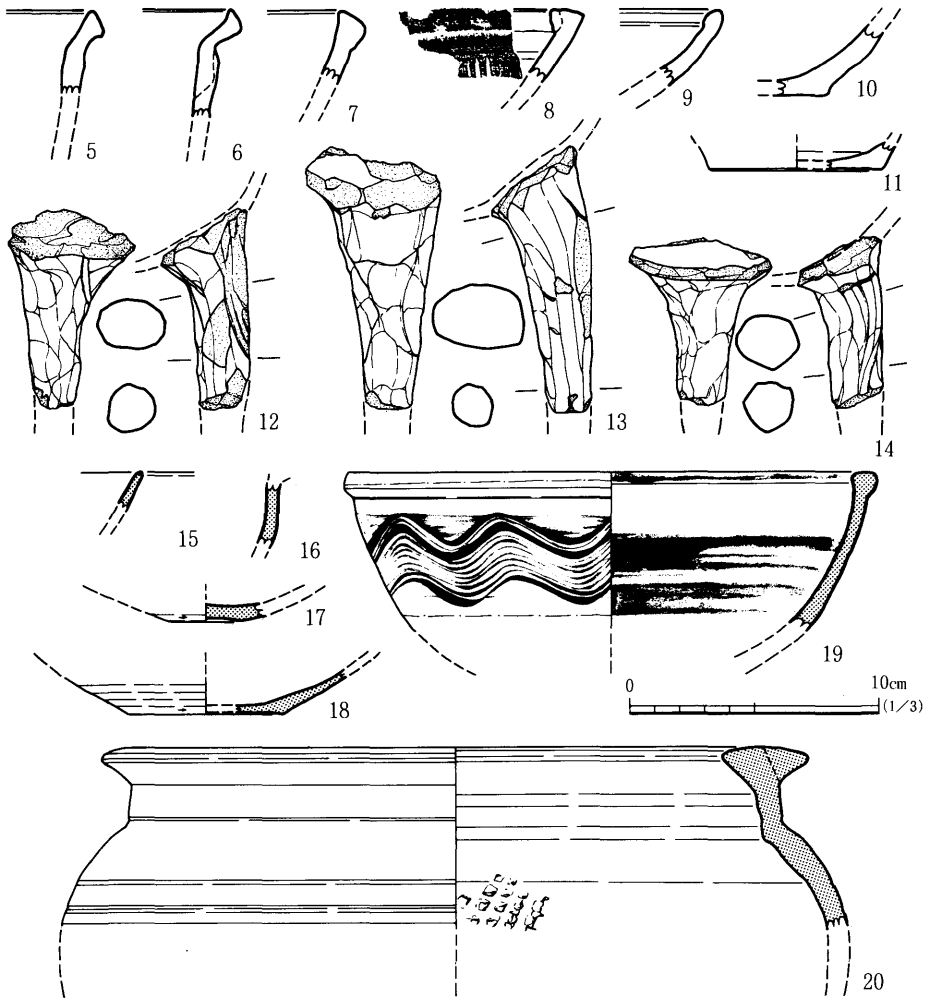


Fig. 11 第I調査区上段部分包含層出土遺物実測図

ある。また、口縁上面は釉を拭き取っている。復元口径は19.2cmを測るが、片口をもつ可能性もあり、その数値には若干の誤差が含まれると考えられる。唐津系で、17世紀末～18世紀前半の年代が考えられる。20は水甕の口縁部および胴部上半の破片である。短く直立した頸部から口縁部が内外に拡張されており、断面はT字形を呈する。胴部には現状では3条の凹線が認められる。内面には格子目のあて具痕を残す。外面および内面に鉄釉を施すが、口縁上面は釉剥ぎを行う。唐津系で、17世紀後半～18世紀前半の年代が考えられる。



### 3 第 I 調査区下段部分 (Fig.12, PL.3(1)・(2)、4(3)、6)

第 I 調査区下段部分における基本層序は、次の順である。

第 I 層：褐灰色土（表土）	第 I b層：橙色砂質土（マサ土）
第 II 層：緑灰色粘土ブロック（埋め土）	第 II b層：緑灰色バラス（埋め土）
第 III 層：灰色粘質土（旧耕土）	第 III b層：黄橙色粘質土（床土）
第 IV 層：黄褐色粘質土（遺物包含層 I）	第 V 層：灰黄色粘質土（遺物包含層 II）
第 V b層：灰黄褐色粘質土（遺物包含層 II'）	第 V c層：黄橙色粘質土（遺物包含層 II''）
第 VI 層：黒褐色粘土（遺物包含層 III）	第 VII 層：浅黄色粘土（八女粘土）

第 I 調査区下段部分は現在の地形と同じく、八女粘土の地山が東から西に向かって傾斜している。このため y=570m 付近までは地山の検出面が標高 19.94m と高く、耕作による削平を受けており、遺物包含層及び遺構は残存しなかった。遺物包含層は地山の傾斜に対応して徐々に厚くなる。第 I 調査区西端の近世大溝に隣接した部分では、地山の八女粘土が標高 18.6m と著しく落込むが、これに反比例して遺物包含層の厚さは 1.0m を超えていた。遺物包含層はその色調や土質から、I・II・III の大きく 3 層に分けることができた。また、遺物包含層 II については、色調の濃淡から更に 3 細分することが可能である。遺物包含層 I からは土師器碗や瓦質鍋、青磁、白磁などが出土している。遺物包含層 II も土師器碗や青磁・白磁などが出土し、遺物包含層 I の遺物内容とほぼ同様である。遺物包含層 II' はわずかに土師器碗や雁股の鉄鏝など中世遺物を含むが、古墳時代の須恵器や土師器の量が増す。遺物包含層 II'' は全く中世遺物を含まず、出土遺物は古墳時代の須恵器や土師器で構成される。遺物包含層 III の出土遺物は、弥生土器や土師器を主体としてわずかに須恵器片を含んでいる。このように、遺物包含層の出土遺物は下層から上層へと新しくなるのであり、攪乱を受けることなくほぼ正常な堆積状況を示しているといえよう。

近世大溝を除く遺構は、八女粘土の上面あるいは遺物包含層 III の下層で検出される。それぞれの遺物包含層上面でも精査をおこなったが、遺構を検出することはできなかった。検出された遺構は、溝 3 条と柱穴 13 基である。これらの遺構からの出土遺物は少なく、土師器碗が出土した第 2 号溝を除いて時期決定は困難であった。ただし、遺構上面に堆積する遺物包含層の遺物をもって、遺構の下限年代を推測することは可能である。近世土師器皿を含んだ遺物包含層 I 及び遺物包含層 II が上面を覆う溝 3 条は、近世以前の年代が与えられる。古墳時代の須恵器を含んだ遺物包含層 III が上面を覆う柱穴 13 基は、古代以前の年代が与えられる。これらの遺構については調査区が狭く、その性格を明らかにするには到らなかった。

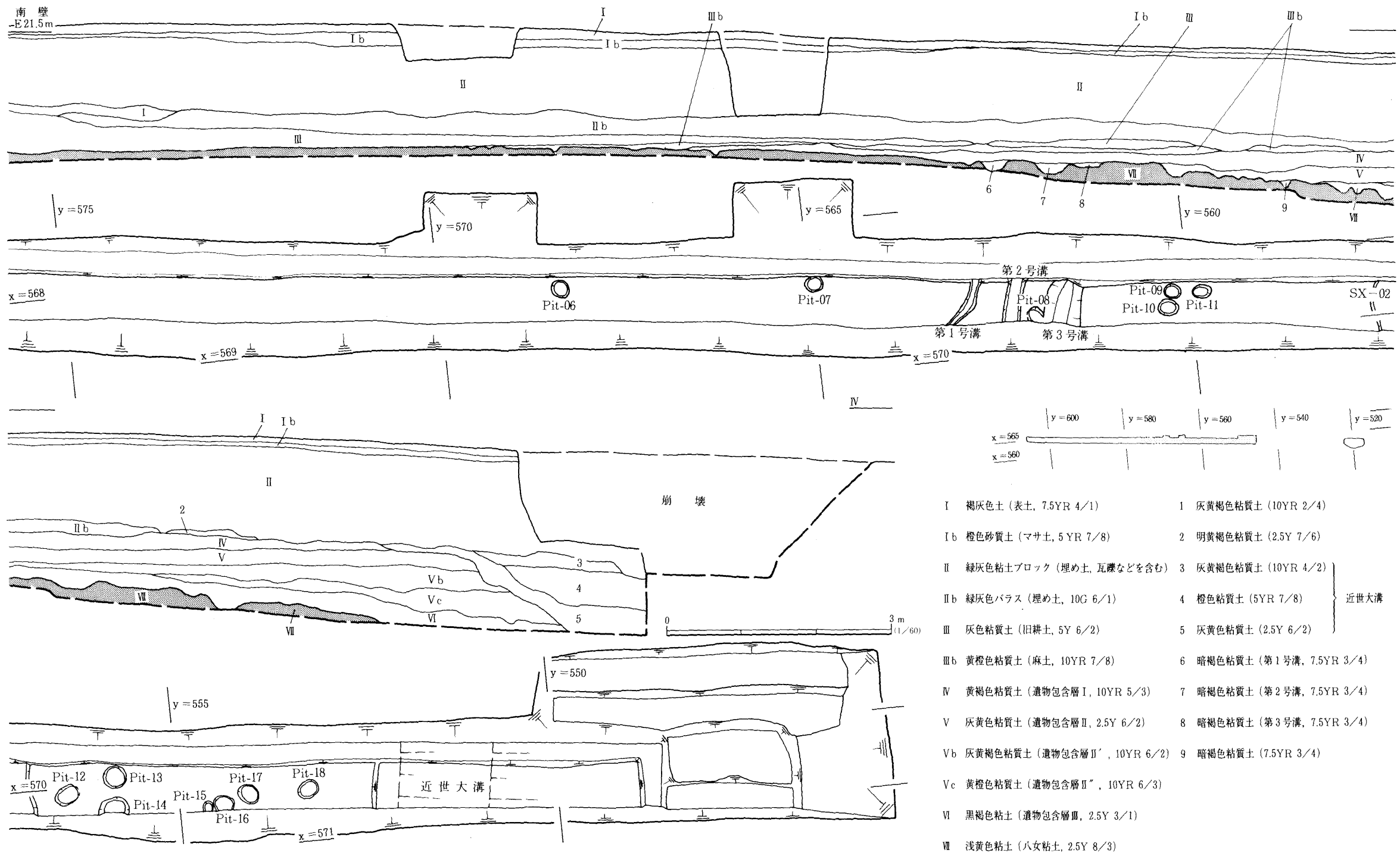


Fig. 12 第I調査区下段部分遺構配置図・南壁土層断面図

第 I 調査区下段部分

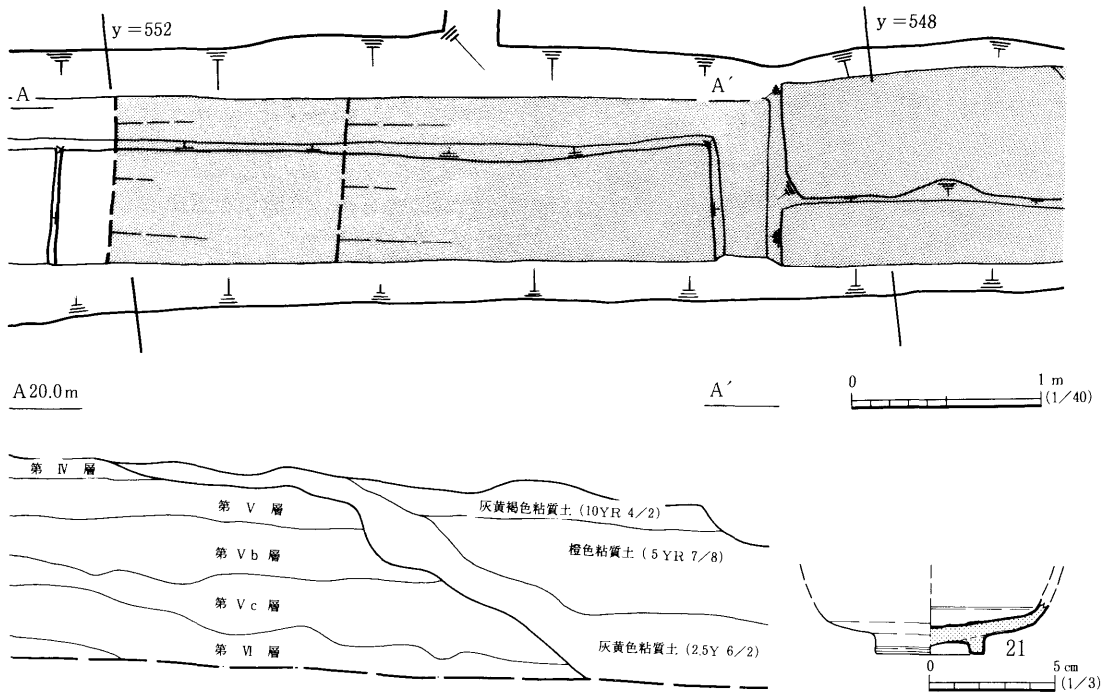


Fig. 13 近世大溝実測図・出土遺物実測図

近世大溝 (Fig.13, PL.4(3))

旧地形の落込みが次第に激しくなるy=552付近において近世大溝の東肩が検出された。現地表より約2.5m、検出面から約1.2mまで掘り下げを行ったが底面には到達せず、そのうえ地盤が脆弱で壁面が崩落したため、作業を中止した。よって、溝の幅や深さは未確認である。埋土中に多量の鳥栖ロームを含む層があり、この大溝は後方の丘陵上部から運ばれた土砂により一気に埋め立てられたものと考えられる。現在、本調査区南側にある本部2号館の西側は崖面となって一段さがり、車庫へと続いている。統合移転前の状況を知る人物より、この崖面は当時のままで、その直下には水路があったとの教示を得た。本調査で検出した大溝は、位置的にもこれに連なるものであろう。

近世大溝出土遺物 (Fig.13-21, PL.12(1))

21は陶器皿である。形態は水平に近い底部から甘く屈曲した腰部を経て、胴部が垂直に立ち上がっている。胴部上半及び口縁部を欠くが、短く終わるものと考えられる。高台を持つが径4.4cmで、腰部の径8.4cmに比べてやや小さめである。内外面及び畳付にいたるまで緑灰色の土灰釉が施される。見込みと畳付に、窯積み時の砂目痕がみられる。唐津系で、17世紀前半の年代が考えられる。

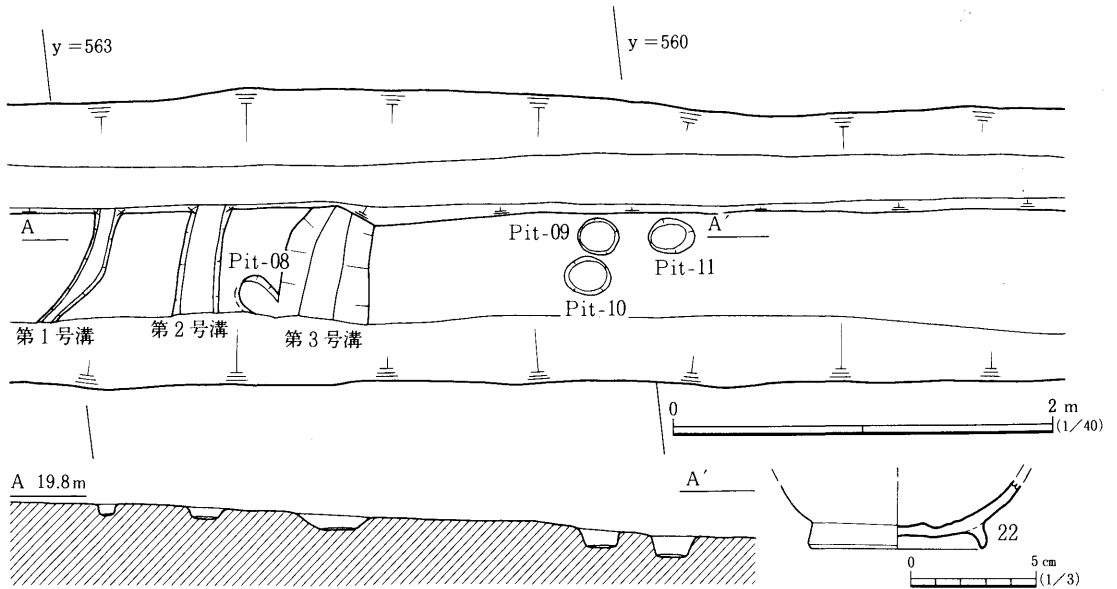


Fig. 14 溝群実測図・第2号溝出土遺物実測図

**溝群** (Fig.14, PL.6(1)・(2))

y = 562~563の付近で、八女粘土を遺構検出面として3条の溝が検出された。遺構検出面の標高は19.75mである。3条の溝は南北方向に軸をもち、ほぼ平行している。東側から、第1号溝、第2号溝、第3号溝とする。第1号溝は幅約10cm、検出面からの深さは約6cmで、底面の標高は19.7mである。第2号溝は幅約20cm、検出面からの深さは4~6cmで、底面の標高は19.68mである。第3号溝は幅約50cm、検出面からの深さは約10cmで、底面の標高は20.61mである。いずれも規模は小さい。溝群はヘラ切り底の土師器碗が出土した第2号溝を除いて、時期決定となる遺物はほとんど出土していない。第1号溝からは図化が不可能な瓦質土器が出土している。ただし、これらの溝の上面は包含層Iによって覆われており、包含層Iが含む土師器皿など中世末~近世初頭の遺物から、溝の下限年代は中世で収まるものと考えられる。

**第2号溝出土遺物** (Fig.14-22, PL.12(2))

22は第2号溝の底面に貼り付くようにして出土した土師器碗である。高台部分は完存するが、胴部の大半は欠失する。高台は貼り付けで、内弯気味に高く突出する。底面には回転ヘラ切り痕及び、板状圧痕をのこす。見込み中央には、ユビオサエによる粘土の盛り上がりを残し、ロクロ成形の始点を示している。胎土には1~2mmの砂粒を多量に含み、色調は灰白色を呈する。内外面共に風化が激しい。

第 I 調査区下段部分

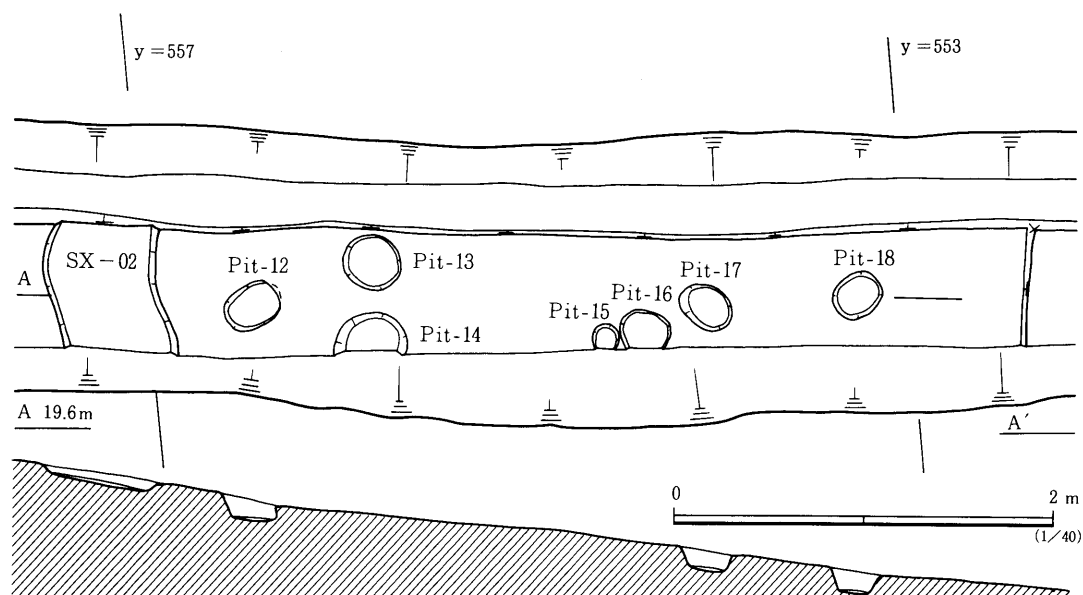


Fig. 15 柱穴群実測図

**柱穴群** (Fig.15, PL.6(3)・(4))

y = 557～553mの付近で、地山の八女粘土よりもわずかに高く、第Ⅵ層黒褐色粘質土の下層を遺構検出面として、柱穴群が検出されている。柱穴は、Pit-12～18の7基である。検出面の標高は、東端のPit-12がもっとも高く19.2mであり、もっとも低い西端のPit-18が18.86mである。東端と西端の柱穴検出面の比高差は、約30cmである。柱穴の直径は、約15cmのPit-15と約40cmのPit-14を除いて、いずれも30cm前後である。検出面から底面までの深さは、5～15cmである。

これらの柱穴群の埋土はほとんど遺物を含まず、Pit-12・14・15からわずかに土器片が、Pit-18からは土器片と凝灰岩の剥片が出土するのにとどまった。いずれも、時期を決定することは不可能な小片であった。しかし、柱穴群の遺構検出面は、弥生土器や土師器を主体としてわずかに須恵器を含んだ第Ⅵ層の下層にある。少なくとも、第Ⅵ層の上層が形成される以前の柱穴群であり、古墳時代後期以前に位置づけられる可能性が高い。埋土の色調によって、柱穴群における時期差を見いだす方法もあるが、Pit-13が灰褐色粘質土 (7.5YR 5/2) の他はいずれも黒褐色粘質土 (7.5YR 2/2) であり、色調に差はなかった。これらの柱穴群がどのような遺構に伴うものかは、調査区幅が狭いため明らかにすることはできなかった。しかし、直径30cm前後でまとまりをもつことから、住居跡に伴う柱穴であった可能性もある。

**第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土遺物** (Fig.16-23~35, PL.9(1)、12(3)・(5))

23・24は甕の口縁部である。23の口縁部は如意状を呈する。弥生時代前期のものと考えられる。24の口縁部は「く」の字に外反する。口縁外面にはタテハケを施し、口縁端部は面をもつ。25は甕の底部である。底部は台状に裾部が突出する。外面は二次焼成により、淡赤白色を呈する。その特徴より、弥生時代中期のものと考えられる。26は弥生時代後期終末の器台かとも考えられるが、口縁部の立ち上がり及び脚部に相当する部分を欠くため判然としない。受け部の内面にはラセン状にハケが施されている。受け部の外端には縦のキザミが施されている。27は弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部である。大きく開いた受け部のやや内側より口縁部が立ち上がる。口縁端部は面をもち、その端部は内側にも外側にも突出する。立ち上がった外面には波状文が多段に施され、受け部の端部には上下2段に竹管文が施される。28~31は土師器の高坏である。28~30は坏部であるが、28・29は口縁端部を欠失している。30は口縁端部が残存するもので、外反し端面は丸い。31は脚部である。裾部は強く屈曲する。柱状部の内面には右方向のケズリが施される。32・33はミニチュア土器の壺である。34は器種不明の鉄器である。35は滑石製模造品の有孔円盤である。約1/2を欠失する。円盤の中央には、径約1.5mmの円孔がうがたれる。円盤の裏表には、一次研磨の幅広い削痕が認められ、未製品の可能性がある。やや厚みをもつ。

**第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ” 出土遺物** (Fig.16-36~42, PL.9(2)、12(6))

36は「く」の字に外反する甕の口縁部である。口縁外面にはタテハケを施し、口縁端部は面をもつ。37は高坏の脚部と考えられる。破片の上部には、円孔の透かしが二つ認められる。ハケ調整を残した外面には、朱が塗布される。38~41は土師器の高坏である。38・39は坏部である。38は口縁端部を外反させ端面は丸い。39は外面屈曲部がわずかに突出している。40・41は脚部である。40は脚裾部が強く屈曲しており、端部は面を持つ。器壁は薄く、胎土には精製粘土を使用する。41は裾部が屈曲するが、その屈曲はさほど強くはない。器壁もやや厚く、胎土には粗い砂粒を混えている。42は滑石製模造品の鎌である。直線的な刃部を表現している。基部には円孔がうがたれている。

**第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ’ 出土遺物** (Fig.16-43~46, PL.9(2)、12(5))

43は垂下口縁壺の頸部である。断面三角の突帯が間隔を開けて、2帯以上貼付けられている。44は須恵器の高坏である。坏部および脚裾部を欠く。脚部の中程に凹線が巡る。45は雁又の鉄鏃である。錆による腐食が激しく、筥被の有無は不明である。46は滑石製模造品の有孔円盤である。二次研磨により薄く仕上げられている。

第I調査区下段部分

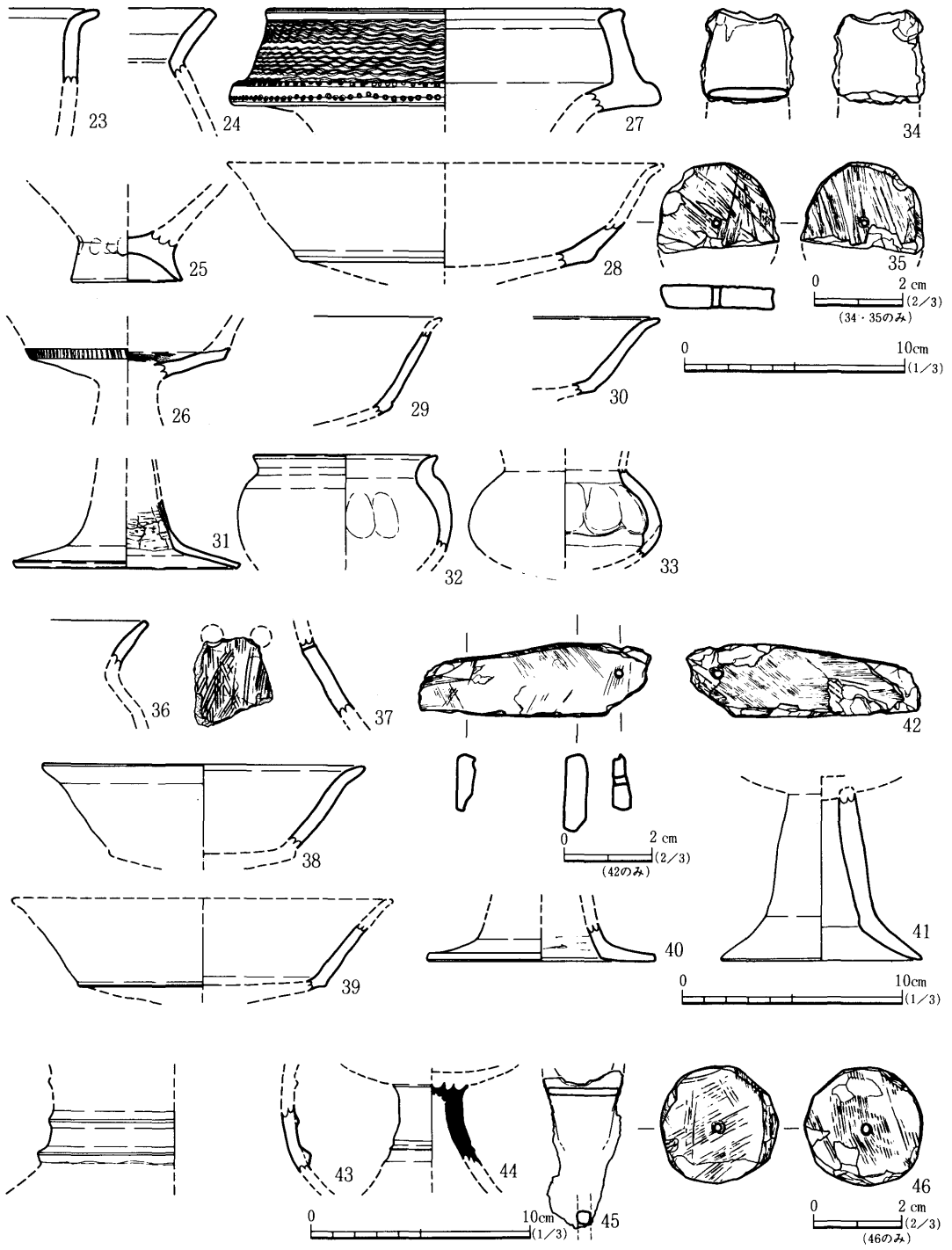


Fig. 16 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ・Ⅱ'・Ⅱ'出土遺物実測図

第Ⅰ調査区下段部分遺物包含層Ⅱ出土遺物 (Fig.17-47~71, PL.10、13)

47は弥生土器の高坏脚部である。坏部と脚裾部を欠失する。残存部分は円柱状を呈し、中空である。器面の風化が激しく、調整を観察することができない。その形態から、後期後半と考えられる。

48は須恵器長頸壺である。頸基部の部分的な破片である。外面基部は接合のナデによって、凹線状にくぼむ。内面に頸胴部の接合痕を明瞭に残す。49は高台をもつ須恵器坏の底部である。底部から胴部への屈曲部に接して高台が貼付けられる。胴部と高台端部は欠失する。底径は7.0cm前後と小さい。

50は土師器の甕と考えられる。口縁部は外方に引き出され、口縁部上面が凹線状にくぼむ。器面にはロクロ成形によるものと考えられる凹凸が認められる。胴部を欠損するが、長胴になると考えられる。胎土には1mm前後の砂粒を多量に含んでいる。51は土師質土器の鍋である。口縁部に接して鏝のついた、いわゆる羽釜と呼ばれるタイプである。鏝は水平ではなく、やや斜め上に突出している。鏝の上面はヨコナデによって浅く、くぼんでいる。外面は鏝より下にタテハケ調整、内面にはヨコハケ調整が施されている。外面の鏝から下は煤が密に付着する。

52~64は土師器碗である。52・53は口縁部の破片で風化が激しいが、外面にはロクロ成形による凹凸を残す。53の直口気味の口縁部に対して、52の口縁部はやや内弯する。54~61は底部の破片で、高台をもつものである。54は断面が方形のしっかりとした高台をもつ。胎土は精製粘土を使用し、風化が激しい。55~57は低いが肉厚の高台をもつものである。55の高台端部は面をもたない。胎土に砂粒を多く含む。56は風化が激しく、高台の形状は明瞭ではない。胎土は精製粘土を使用する。57の高台は、幅が厚いのに対し高さは低い。胎土は砂粒を多く含む。58は高いが華奢な高台である。高台端部が内側にやや巻き込まれている。胎土は精製粘土を使用する。59~61は断面が三角形の細い高台をもつものである。59は器壁がやや薄く、底面には板敷状の圧痕を残す。胎土は精製粘土に微砂粒を多く含む。60・61は胎土に精製粘土を使用し、色調は白色を呈する。いずれも器面の風化が激しい。62~64は高台をもたない底部である。胎土には赤色斑粒を含んだ精製粘土を使用するが、器面の風化が激しい。大型の皿の底部である可能性もある。

65・66は土師器皿の底部である。いずれも風化が激しい。65は風化した底面に、かすかな糸切り痕を残している。胎土には微砂粒を多く含む。66はロクロから切り離す際の工具痕を、底部側面に残す。胎土は精製粘土に赤色斑粒を含んでいる。



第I調査区下段部分

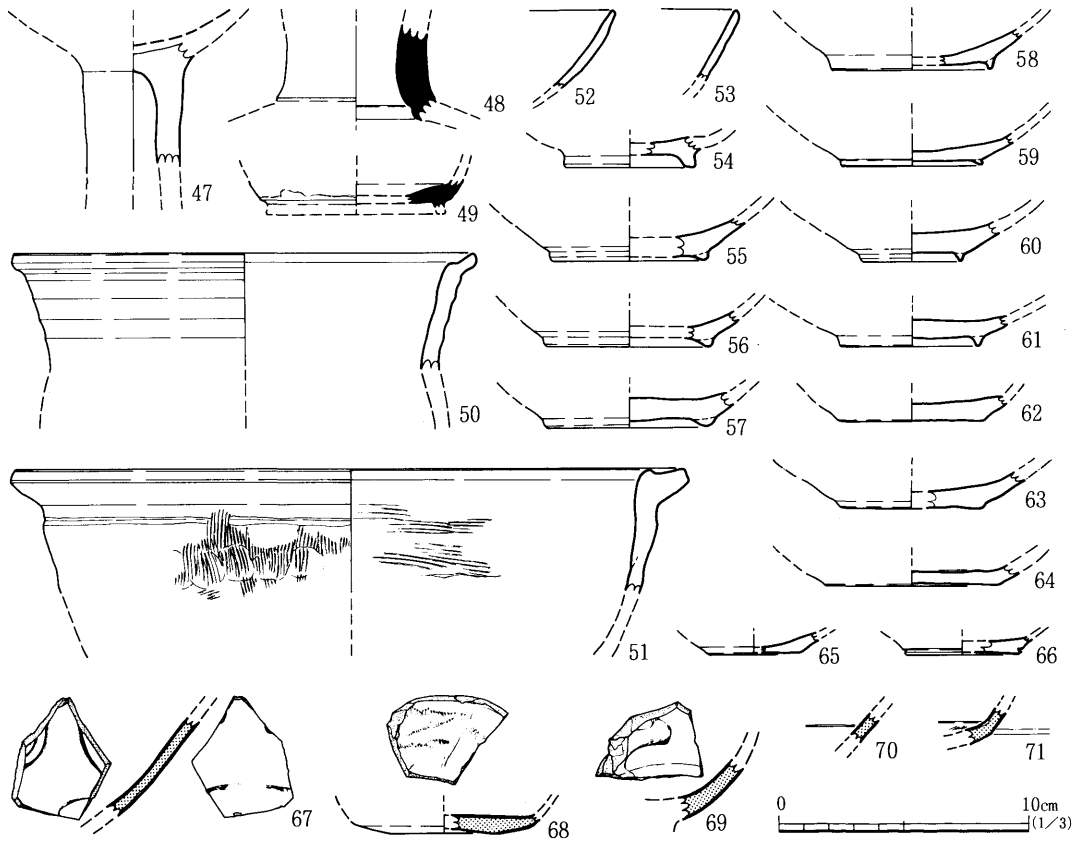


Fig. 17 第I調査区下段部分遺物包含層II出土遺物実測図

67・69は龍泉系の青磁碗である。67は体部内面に片彫りによって、蓮華文が施されている。また、体部外面下半には、凹線が一条巡っている。69は胴部下半の高台に近い破片である。内面には片彫りによって蓮華文が施されている。いずれも12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。

68・71は同安系の皿である。68は内面見込み部に、ヘラによる片彫りと櫛による刺突によって草花文を施す。全面施釉した後、底面の釉はカキ取られ露胎となる。71は内面の体部と見込み部の境に沈線状の段を有する。内面は櫛による文様が施される。底部の釉はカキ取られ露胎となる。いずれも12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。

70は白磁碗である。内面見込み部に沈線状の段をもつ。玉縁の口縁をもつ器形の胴部片と考えられる。

## 第 I 調査区下段部分遺物包含層 I 出土遺物 (Fig.18-72~119, PL.11、13)

72は本調査で唯一出土した縄文土器片である。風化が激しいが、外面には貝殻条痕、内面にはケズリ痕が観察できる。

73~92は土師器碗である。73・74は口縁部片である。73は胎土に精良な粘土を使用する。74は胎土に微砂粒を含む。いずれも、口縁端部が甘い面をもって外面に傾斜し、内面は端部から約1.5cm下までがヨコナデによって浅くくぼむ。75~88は高台をもつ土師器碗の底部片である。75~77は高台が高く突出するものである。いずれも胎土は粗い。75は底面にヘラ切り痕を残す。78は端面がやや丸い断面三角形の高台がつくが、胎土に微砂粒を多量に含む。79は高い高台をもつが、胎土は精良な粘土を基本として大粒の砂粒を含むものである。80~83は端面がやや丸い断面三角形の高台をもつもの。81・82は胎土に精良な粘土を用いる。84~88は低い断面カマボコ状の高台をもつもの。いずれも胎土は精良な粘土である。89~92は高台をもたないもの。89・91は底面に糸切り痕をもつ。

93~97は土師器皿である。いずれも風化が激しい。93は唯一口縁部から底部までの全形がわかる個体である。底部からの立ち上がりは短く、口縁端部は丸い。94・95は底部がやや厚めのものである。

98~106は瓦質土器の鍋である。いずれも風化が激しい。98は外側に「く」の字に屈曲する口縁部をもつ。口縁端部は面をもち、浅い2条の凹線が施されている。瓦質土器と思われるが、風化が激しく色調は淡赤褐色を呈しており、瓦質土器の鍋とは時期や器種が異なる可能性もある。99~101は口縁部に接して鏝が貼り付けられるもので、いわゆる羽釜である。99・100は風化が激しいが、101は比較的残存状態が良く、外面の鏝より下に煤が付着している。102は足鍋の脚部である。103~106は鍋口縁部の小片である。いずれも口縁端部がさほど内面に突出しておらず、岩崎編年のⅢ型式に属する。ただし、106に関しては口縁部の屈曲がなく、鍋ではなく鉢の可能性もある。内面にはヨコハケ調整を残す。

107・112・117・118・119は白磁である。107・118・119は碗である。107は玉縁の口縁部をもつ。119は高台の低い底部である。外面下半部は露胎。118は119とは異なり、高台が高く突出すると考えられる。外面下半部は露胎。117は皿である。外面下半部は露胎。いずれも12世紀末~13世紀前半のものと考えられる。108・109・111・113・115は龍泉系の青磁である。109はやや外反する口縁部であるが、器面にはかすかな稜があり、体部に連弁文をもつものと考えられる。115は体部外面に、連弁文を削り出している。110は同安系の青磁碗、116は同安系の青磁皿である。116は見込み部に草花文を施す。114は産地不明の青磁碗である。

第 I 調査区下段部分

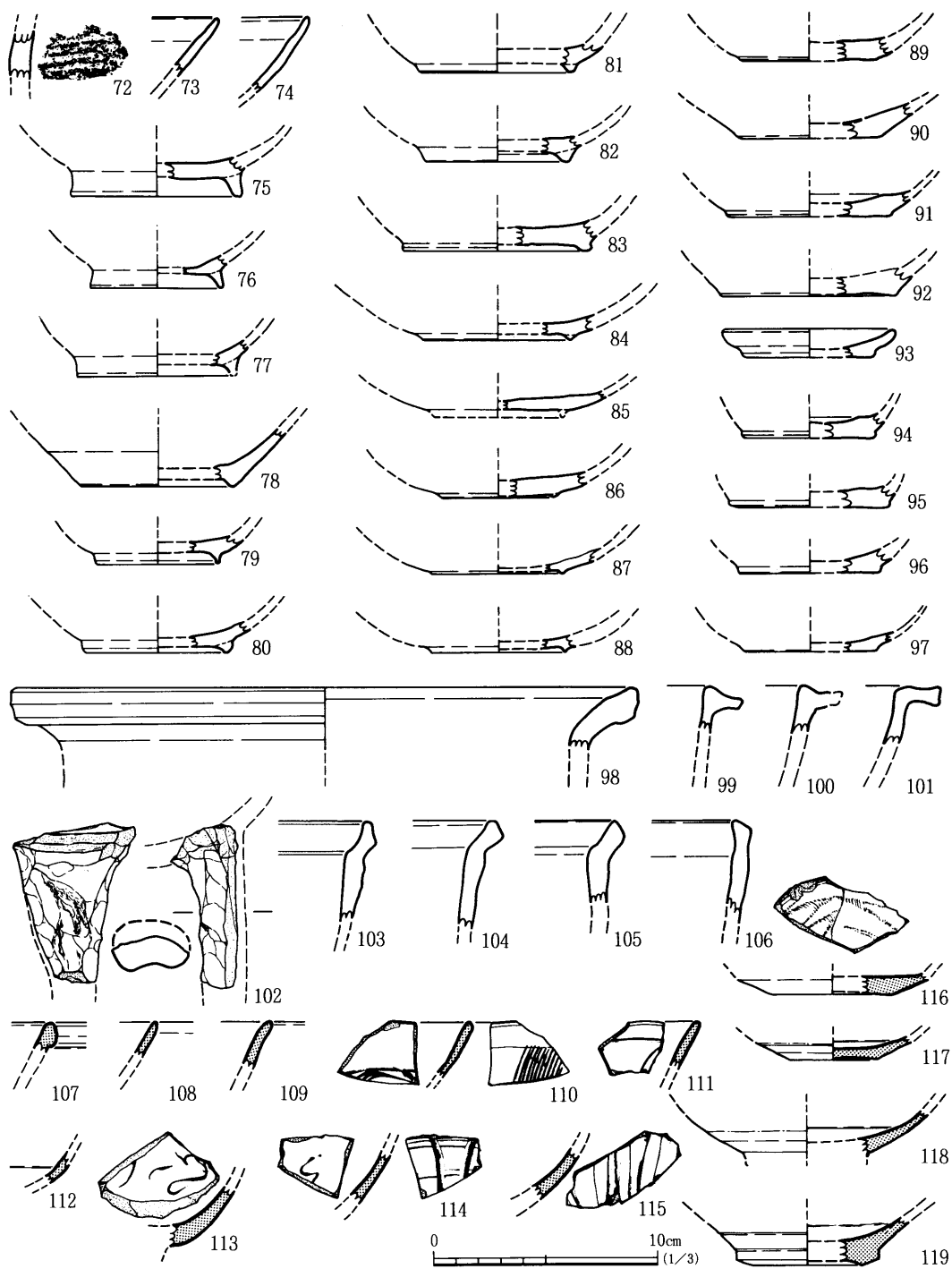


Fig. 18 第 I 調査区下段部分遺物包含層 I 出土遺物実測図

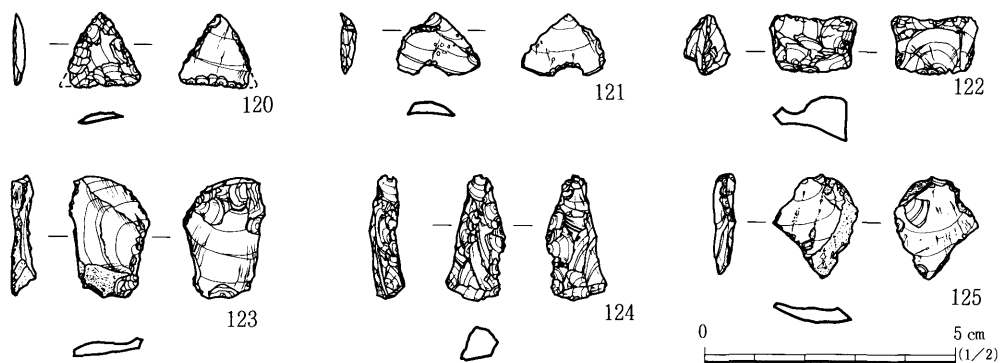


Fig. 19 第I調査区遺物包含層出土石器実測図

### 第I調査区遺物包含層出土石器 (Fig.19-120~125, PL.14)

120の石鏃は、平基式で平面形はほぼ正三角形に近い形態をもつ。表側には周縁に細部調整が施されるが、裏側のものにくらべると大きい。裏側の細部調整は外縁部だけにとどまる小さなもので、中央に大きく素材面を残しており主要剥離面と考えられる。

121・123・124・125は二次加工のある剥片である。いずれも石材は、黒曜石である。121は左右側縁及び下端部に細部調整が施される。123は背面の下端部右半に細部調整を施す。125は背面上端部に打点をもつ大きな剥離面がある。

122は楔形石器の可能性はある。背面下端部と腹面の上下端部に使用痕と思われる小さな剥離面がある。石材は黒曜石である。

### 4 第II調査区 (Fig.20, PL.3(3)、4(4))

第II調査区は、第I調査区から西に約20.0m離れた地点に設定されている。本来、第I調査区と第II調査区は一連の調査区として設定されたが、予想以上に旧地形の落込みが激しく、掘削の幅に対して深さが深くなりすぎたため、設定した調査区の1/3を残して掘削を中止した。ここまでが第I調査区であり、土層確認のために西側に約20.0m離れた地点を長さ5.0m、幅2.0mの規模で掘削したものを第II調査区とした。

第II調査区における基本層序は、次の順である。

- |                        |                             |
|------------------------|-----------------------------|
| 第I層：埋め土I               | 第I b層：埋め土II (マサ土)           |
| 第II層：明青灰色粘質土 (旧耕土)     | 第III層：暗灰黄色粘質土 (床土)          |
| 第IV層：黄褐色粘土 (遺物包含層I)    | 第V層：灰色粘土 (遺物包含層II)          |
| 第VI層：灰黄褐色粘土 (遺物包含層III) | 第VII層：灰白色砂+明緑灰色粘土 (遺物包含層IV) |
| 第VIII層：明緑灰色粘土 (地山)     |                             |

第II調査区

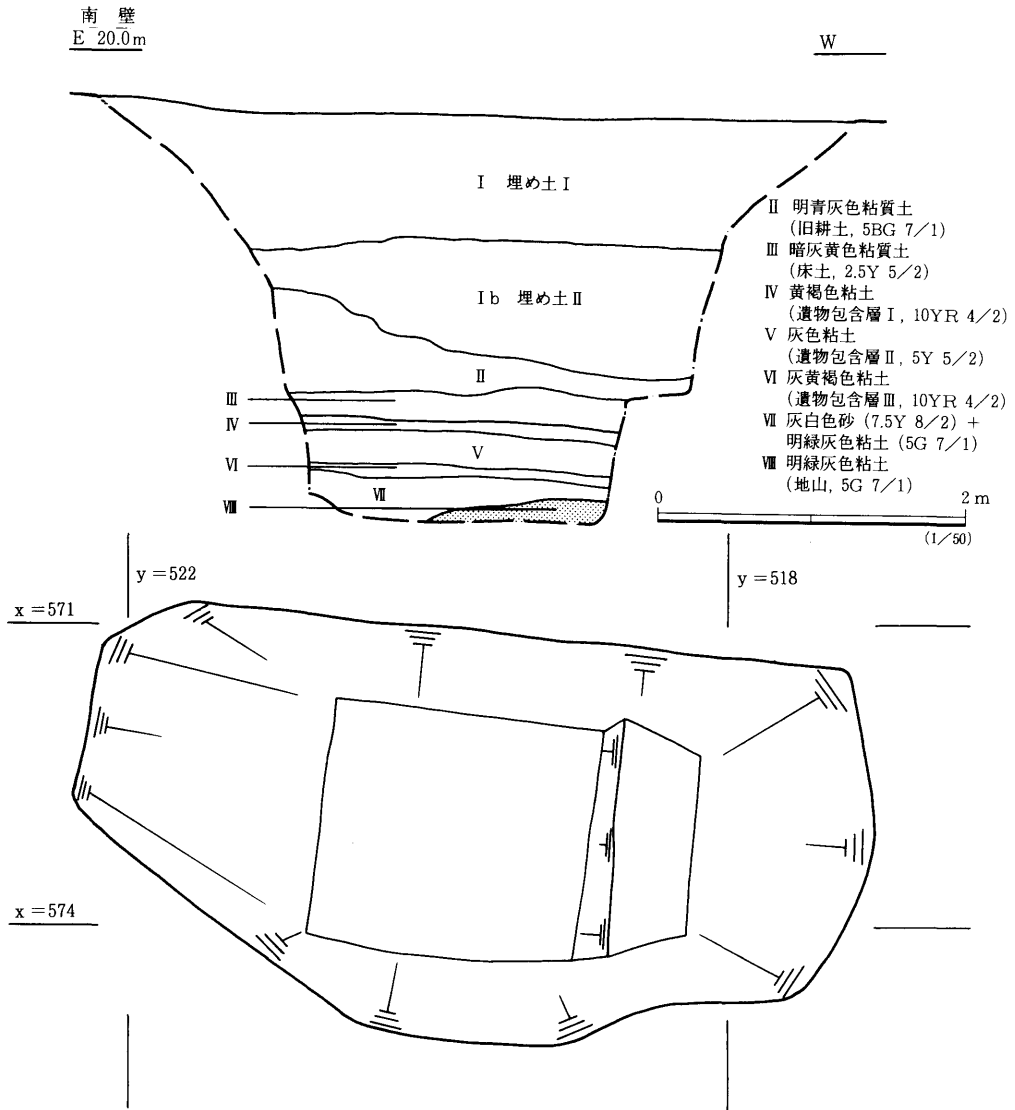


Fig. 20 第II調査区平面図・南壁土層断面図

第II調査区の地山上面は標高17.0mである。第I調査区西端の地山上面は標高18.6mであり、その比高差は1.6mにも及ぶ。第III層の床土より下が、遺物包含層である。しかし、遺物量は少なく、土器片は摩滅している。第V層の灰色粘土までは、瓦質土器片や須恵器片を含んでいる。最下層の第VII層は、古墳時代前期の土師器片を含んでいる。第V層から下は砂を多く含んでおり、最下層の第VII層に至っては灰白色砂と明緑灰色粘土が互層になって堆積している。その堆積状況は、河川跡の堆積とよく似ている。

## 5 小結

調査の結果、古墳時代～近世までの溝や柱穴が検出された。これらの遺構に関しては、調査区の幅が狭いために、その性格を明らかにしえなかった。しかし、幅は狭いものの長大な調査区は、丘陵の上部から低地部に向かってトレンチを入れる形となり、旧地形の落込みおよびそれに伴う地山の変化を明らかにした。第Ⅰ調査区の東端では地山の上面が標高21.3mを測るが、第Ⅰ調査区西端の地山上面の標高は18.7mであり、その比高差は2.5mにも及ぶ。更に、第Ⅰ調査区西端より西に約20.0m離れた第Ⅱ調査区の地山上面は標高17.0mである。標高差が激しいために、地山となる土層がそれぞれの地点で異なる。第Ⅰ調査区のy=586を境として、高い東側が鳥栖ローム、低い西側が八女粘土を地山とする。これらは洪積段丘に堆積した、阿蘇山からの噴積物である。第Ⅱ調査区の地山は明緑灰色粘土であり、第Ⅰ調査区の洪積段丘を侵食した沖積低地の埋積土と考えられる。

旧地形の落込みは、地山の上面で検出された遺構や遺物包含層の最下層から出土した遺物より、古墳時代中期以降にその埋没が始まったものと考えられる。遺物包含層の最も新しい遺物は岩崎編年Ⅲ型式の瓦質足鍋であり、15世紀の前半には落込みの埋没がほぼ完了していたものと考えられる。この後に、近世棚田の開墾が行われたわけであるが、上段部分遺物包含層や近世溝から出土した陶磁器類により、遅くとも18世紀の初頭には開墾が開始されていたものと考えられる。開墾の契機については本部2号館で検出された、伊万里製の染め付け碗を伴う近世屋敷との関連を考えていく必要があろう。

[注]

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内第Ⅰ地区D区発掘調査概報」(山口大学、1971年)  
山口大学吉田遺跡調査団「山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報」(山口大学、1976年)
- 2) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1985年)  
山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内本部2号館新営に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅷ、1990年)
- 3) 山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館排水管布設に伴う発掘調査」(『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅳ、1985年)
- 4) 岩崎仁志「防長地域の足鍋について」(『山口考古』第17号、1988年)
- 5) 岩崎仁志「防長型播鉢について」(『山口考古』第19号、1990年)

Tab. 2 出土遺物観察表

法量( )は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	備考
SX-01					
1	土師器 高坏 脚部		黄灰色(外面一部橙色)	精製粘土の中に1mm前後の砂粒を含む	
Pit-04					
2	土師器 足鍋	①(34.5)	淡褐色(外底は赤褐色)	1~3mmの白色砂粒を含む	外面煤付着。胴部に接合痕を残す
3	土師器 碗 口縁部	①(15.0)	灰白色	精製粘土	風化が激しい
4	土師器 碗 口縁部		白色	精製粘土	
上段包含層					
5	瓦質土器 鍋 口縁部		黒灰色	精製粘土に砂粒を含む	
6	瓦質土器 鍋 口縁部		灰青色	精製粘土	
7	瓦質土器 こね鉢 口縁部		灰黒色	精製粘土に1~4mmの砂粒を含む	風化が激しい
8	瓦質土器 すり鉢 口縁部		①灰色 ②暗青灰色	精製粘土に砂粒を含む	
9	土師質土器 ほうろく 口縁部		淡褐色	精製粘土に1~2mmの砂粒を含む	
10	瓦質土器 こね鉢 底部		①黒灰色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	内面に光沢をもつ
11	土師器 皿 底部	②(6.8)	①橙色 ②淡橙褐色	精製粘土	風化が激しい
12	瓦質土器 足鍋 脚部		青灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む	
13	瓦質土器 足鍋 脚部		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
14	瓦質土器 足鍋 脚部		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	
15	青磁 碗 口縁部		素地 白色 釉調 白色(やや青味)		伊万里系
16	青磁 盤		素地 灰白色 釉調 緑色		
17	陶器 底部	②2.8	①青灰色 ②黒青色	緻密	
18	陶器 土鍋 底部	②(6.2)	素地 茶色 釉調 暗赤褐色	緻密	内面のみ鉄釉
19	陶器 大鉢	①(19.2)	素地 灰白色 釉調 緑色	緻密	外面 白土の刷毛目 内面 白土の帯
20	陶器 水甕	①(23.6)	素地 赤褐色 釉調 暗赤茶色	2mm前後の砂粒を含む	唐津系
近世大溝					
21	陶器 皿 底部	②4.4	素地 灰色 釉調 緑灰色		唐津系
SD-02					
22	土師器 碗 底部	②7.2	灰白色	1~2mmの砂粒を多量に含む	風化が激しい 底部へら切り
遺物包含層Ⅲ					
23	弥生土器 甕 口縁部		黄褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	風化が激しい
24	弥生土器 甕 口縁部		淡黄色	1~4mmの砂粒を含む	
25	弥生土器 甕 底部	②(4.8)	淡赤白色	1~4mmの砂粒を含む	
26	弥生土器 器台		①淡黄褐色 ②淡橙褐色	精製粘土に微砂粒を含む	
27	弥生土器 複合口縁壺 口縁部	①(15.9)	淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
28	土師器 高坏 坏部		淡黄灰色	1mm前後の砂粒を含む	風化が激しい
29	土師器 高坏 坏部		明褐色	1mm前後の砂粒を含む	
30	土師器 高坏 坏部		淡黄色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
31	土師器 高坏 脚部	②(10.0)	淡褐色	2~3mmの砂粒を含む	
32	ミニチュア土器 壺	①(8.3)	淡褐色	1~2mmの砂粒を含む	
33	ミニチュア土器 壺		淡褐色	精製粘土に微砂粒を含む	

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

法量( )は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	備考
遺物包含層Ⅱ					
36	弥生土器 甕 口縁部		暗褐色	1～2mmの砂粒を含む	
37	弥生土器 高坏 脚部		淡灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	外面に朱を塗布
38	土師器 高坏 坏部	②(14.6)	明褐色	1～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
39	土師器 高坏 坏部		明褐色	1～2mmの砂粒を含む	
40	土師器 高坏 脚部	②(10.4)	赤白色	精製粘土	
41	土師器 高坏 脚部	②(9.0)	淡黄灰色	1～4mmの砂粒を含む	風化が激しい
遺物包含層Ⅱ'					
43	弥生土器 垂下口縁壺		灰褐色	1mm前後の砂粒を含む	断面三角突帯をもつ
44	須恵器 高坏 脚部		明青灰色	精製粘土	
遺物包含層Ⅱ					
47	弥生土器 高坏 脚部		淡赤色	2～4mmの砂粒を含む	
48	須恵器 長頸壺		青灰色	白色粒を含む	
49	須恵器 坏 底部		青灰色	精製粘土	
50	土師器 甕 口縁	①(18.3)	灰褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	
51	土師器 鍋 口縁	①(23.9)	①黒色 ②淡黄褐色	精製粘土に微砂粒を含む	外面 煤付着
52	土師器 碗 口縁		淡褐色	精製粘土に微砂粒を含む	風化が激しい
53	土師器 碗 口縁		灰白色(一部灰色)	精製粘土	
54	土師器 碗 底部	②(5.2)	淡黄褐色	精製粘土に赤色斑粒を含む	風化が激しい
55	土師器 碗 底部	②(6.0)	灰褐色	1～2mmの砂粒を含む	
56	土師器 碗 底部	②(6.6)	黄白色	赤色斑粒と2～3mmの砂粒を含む	風化が激しい
57	土師器 碗 底部	②6.4	淡赤白色	微砂粒を多量に含む	
58	土師器 碗 底部	②(6.4)	①淡黄色 ②灰白色	精製粘土	
59	土師器 碗 底部	②(5.6)	淡褐色	精製粘土	
60	土師器 碗 底部	②(4.0)	白色	精製粘土	風化が激しい
61	土師器 碗 底部	②(5.7)	白色	精製粘土	風化が激しい
62	土師器 碗 底部	②(5.6)	淡橙色	精製粘土に赤色斑粒を含む	風化が激しい
63	土師器 碗 底部	②(5.6)	橙色	精製粘土に赤色斑粒を含む	風化が激しい
64	土師器 碗 底部	②(7.0)	橙色	精製粘土に赤色斑粒を含む	風化が激しい
65	土師器 皿 底部	②(3.6)	淡赤白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	風化が激しい
66	土師器 皿 底部	②(4.6)	橙色	精製粘土	
67	青磁 碗		素地 灰色 釉調 緑色		龍泉窯系
68	青磁 皿 底部		素地 灰白色 釉調 水色		同安窯系
69	青磁 碗		素地 灰白色 釉調 緑色		龍泉窯系
70	白磁 碗		素地 白色 釉調 白色		
71	青磁 皿		素地 灰白色 釉調 緑灰色		同安窯系
遺物包含層Ⅰ					
72	縄文土器		①明褐色 ②黒灰色	2～3mmの砂粒を含む	外面 貝殻条痕 内面 ケズリ
73	土師器 碗 口縁部		淡白黄色	精製粘土	風化が激しい
74	土師器 碗 口縁部		淡明褐色	微砂粒を多量に含む	



出土遺物観察表

法量( )は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	備考
75	土師器 埴 底部	② (7.6)	①淡黄褐色 ②灰褐色	1~2mmの砂粒を多量に含む	ヘラ切り底
76	土師器 埴 底部	② (5.6)	①淡赤白色 ②灰白色	赤色斑粒と1~2mmの砂粒を含む	
77	土師器 埴 底部		灰白色	1~2mmの砂粒を含む	
78	土師器 埴 底部	② (6.8)	①灰白色 ②灰色	微砂粒を多量に含む	
79	土師器 埴 底部	② (5.4)	淡赤白色	精製粘土に2~4mmの砂粒を含む	風化が激しい
80	土師器 埴 底部	② (6.4)	①淡黄褐色 ②灰白色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
81	土師器 埴 底部	② (6.8)	①明黄褐色 ②淡黄褐色	精製粘土	
82	土師器 埴 底部	② (6.3)	灰白色(底部外面黒灰色)	精製粘土に2~4mmの砂粒を含む	
83	土師器 埴 底部	② (8.2)	淡黄褐色	2~3mmの砂粒を含む	
84	土師器 埴 底部	② (6.6)	①灰白色 ②淡黄灰色	精製粘土に微砂粒を含む	
85	土師器 埴 底部		淡黄白色	精製粘土	
86	土師器 埴 底部	② (5.0)	黄灰色	精製粘土	
87	土師器 埴 底部	② (5.4)	淡黄白色	精製粘土	風化が激しい
88	土師器 埴 底部	② (6.0)	淡黄白色	精製粘土	
89	土師器 埴 底部	② (6.0)	淡黄灰色	精製粘土に砂粒を含む	糸切り底
90	土師器 埴 底部	② (6.0)	①明褐色 ②褐灰色	精製粘土	風化が激しい
91	土師器 埴 底部	② (7.0)	①淡橙色 ②灰黒色	精製粘土に砂粒を含む	糸切り底
92	土師器 埴 底部	② (7.8)	淡黄色(底部が淡赤色)	精製粘土	風化が激しい
93	土師器 皿	① (7.4) ② (5.8)	淡橙色	精製粘土	
94	土師器 皿 底部	② (5.8)	淡黄灰色	精製粘土に赤色斑粒を含む	
95	土師器 皿 底部	② (6.5)	淡橙色	精製粘土	
96	土師器 皿 底部	② (6.2)	淡橙色	精製粘土に赤色斑粒を含む	
97	土師器 皿 底部	② (5.8)	淡橙色	精製粘土に赤色斑粒をわずかに含む	
98	土師器 鍋 口縁部	① (27.5)	淡赤褐色	2~3mmの砂粒を含む	
99	瓦質土器 鍋 口縁部		暗灰色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
100	瓦質土器 鍋 口縁部		灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	風化が激しい
101	瓦質土器 鍋 口縁部		灰褐色(煤により黒色)	1~2mmの砂粒を含む	銕直下に煤が付着
102	瓦質土器 足鍋 脚部		淡赤色	1~2mmの砂粒を含む	
103	土師質 鍋 口縁部		灰褐色	1~2mmの砂粒を含む	
104	瓦質土器 鍋 口縁部		①灰褐色 ②灰黒色	1mm前後の砂粒を含む	
105	瓦質土器 鍋 口縁部		黒灰色	1mm前後の砂粒を含む	
106	瓦質土器 鍋(鉢) 口縁部		黒灰色	1mm前後の砂粒を含む	
107	白磁 碗 口縁部		素地 白色 釉調 白色(やや青味)		
108	青磁 碗 口縁部		素地 灰白色 釉調 緑灰色		龍泉窯系
109	青磁 碗 口縁部		素地 灰白色 釉調 灰緑色		龍泉窯系
110	青磁 碗 口縁部		素地 灰白色 釉調 緑色		同安窯系
111	青磁 碗 口縁部		素地 白色 釉調 緑色		龍泉窯系
112	白磁		素地 白色 釉調 白色		
113	青磁 碗		素地 灰白色 釉調 緑色		龍泉窯系
114	青磁 碗		素地 灰白色 釉調 オリーブ色		

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

法量( )は復元値

番号	器種	法量(cm) (①口径②底径③器高)	色調 (①外面②内面)	胎土	備考
115	青磁 碗		素地 白色 釉調 水色		龍泉窯系
116	青磁 皿 底部	② (5.2)	素地 灰白色 釉調 水色		同安窯系
117	白磁 皿 底部	② (4.0)	素地 灰白色 釉調 緑灰色		ヘラ切り底部
118	青磁 碗		素地 灰白色 釉調 灰色		
119	白磁 碗 底部	② (4.7)	素地 灰白色 釉調 白色		

法量( )は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
遺物包含層Ⅲ							
35	滑石製模造品 有孔円盤	径2.7 孔径0.15		0.6	(5.86)	結晶片岩	未製品か
遺物包含層Ⅱ''							
42	滑石製模造品 鎌	5.3	1.7	0.5	7.71	結晶片岩	ほぼ完形
遺物包含層Ⅱ'							
46	滑石製模造品 有孔円盤	径2.8 孔径0.2		0.4	5.27	結晶片岩	ほぼ完形

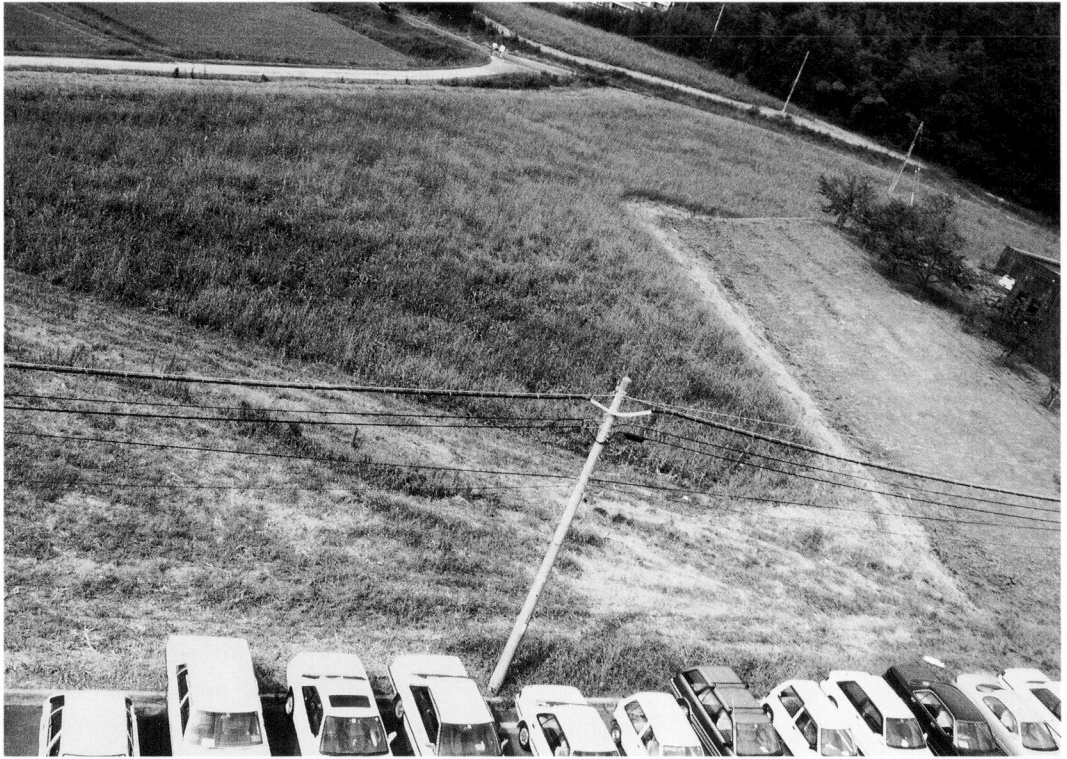
法量( )は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
120	石鏃	1.5	(1.5)	0.2	0.43	姫島産黒曜石	遺物包含層Ⅰ
121	二次加工のある剥片	1.2	1.7	0.3	0.54	長崎産黒曜石	遺物包含層Ⅱ
122	楔形石器?	1.1	1.7	0.9	1.29		遺物包含層Ⅰ
123	二次加工のある剥片	2.4	1.6	0.5	1.75	長崎産黒曜石	遺物包含層Ⅱ
124	二次加工のある剥片	2.5	1.1	0.6	1.51		遺物包含層Ⅱ'
125	二次加工のある剥片	2.1	1.7	0.3	1.16		遺物包含層Ⅲ

法量( )は現存値

番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	備考
遺物包含層Ⅲ					
34	不明鉄器	(2.2)	1.9	0.3	途中で欠損しており形状不明
遺物包含層Ⅱ'					
45	鉄鏃	(7.1)	3.65	0.4 莖径0.6	雁股式

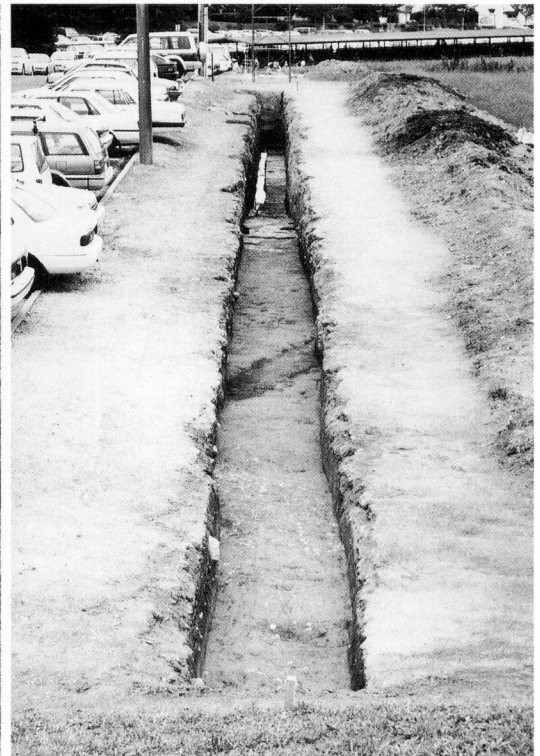
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査  
(1)



(1) 第I調査区調査前全景（南から）



(2) 第I調査区調査前全景（東から）



(3) 第I調査区遺構完掘状況（東から）

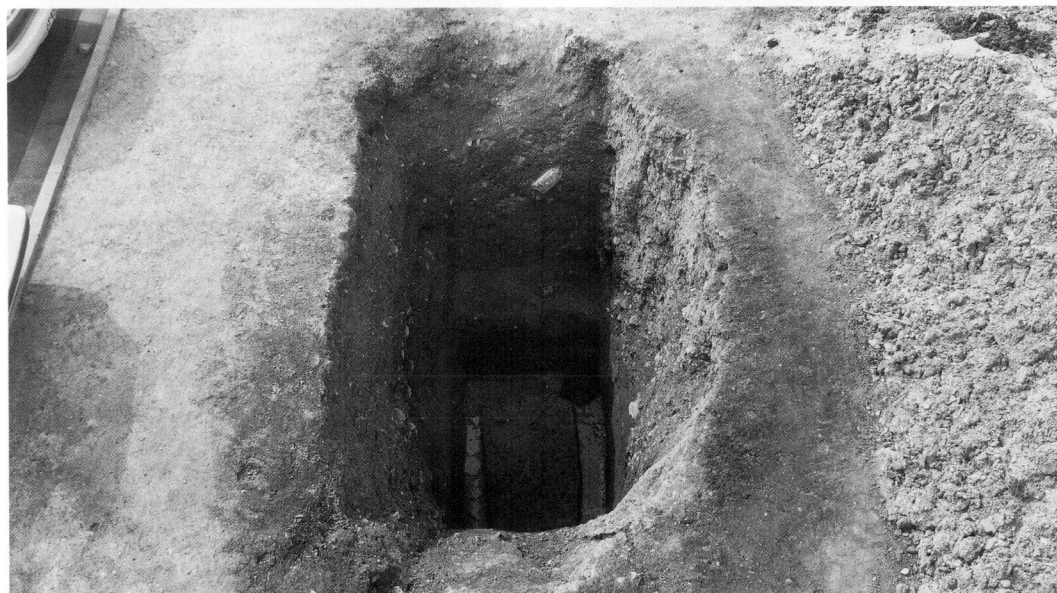
(2)



(1) 第Ⅰ調査区遺構検出状況（西から）



(2) 第Ⅰ調査区遺構完掘状況（西から）



(3) 第Ⅱ調査区完掘状況（東から）

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査 (3)



(1) 第I調査区東端南壁土層断面



(2) 第I調査区SX-01付近南壁土層断面



(3) 第I調査区近世大溝付近南壁土層断面



(4) 第II調査区南壁土層断面



(1) 第I調査区上段部分 Pit-01・02完掘状況 (北から)



(2) 第I調査区上段部分 Pit-03・04検出状況 (南から)



(3) 第I調査区上段部分 Pit-04足鍋出土状況 (東から)



(4) 第I調査区上段部分 Pit-03・04・05完掘状況 (南から)

(4) 吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

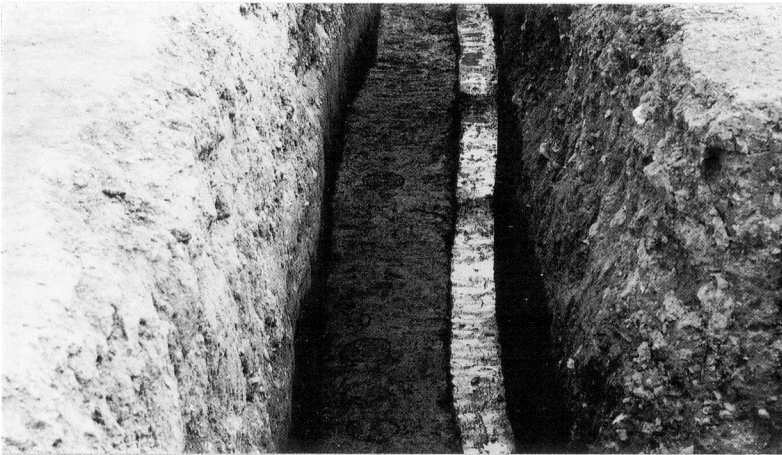
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査 (5)



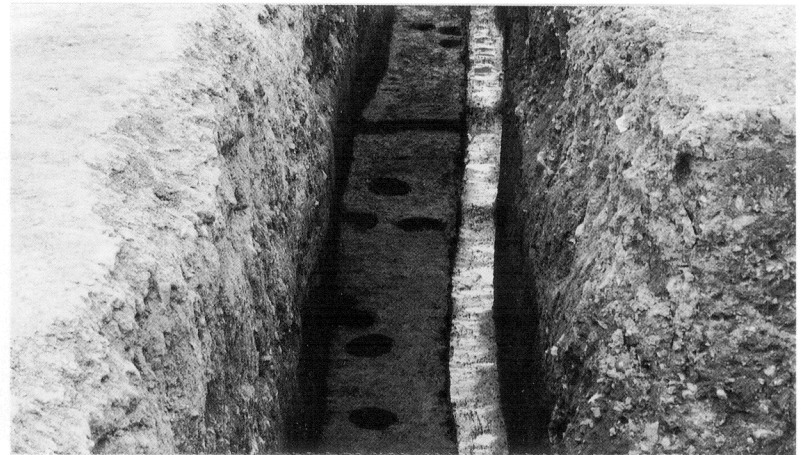
(1) 第I調査区下段部分溝群検出状況(南から)



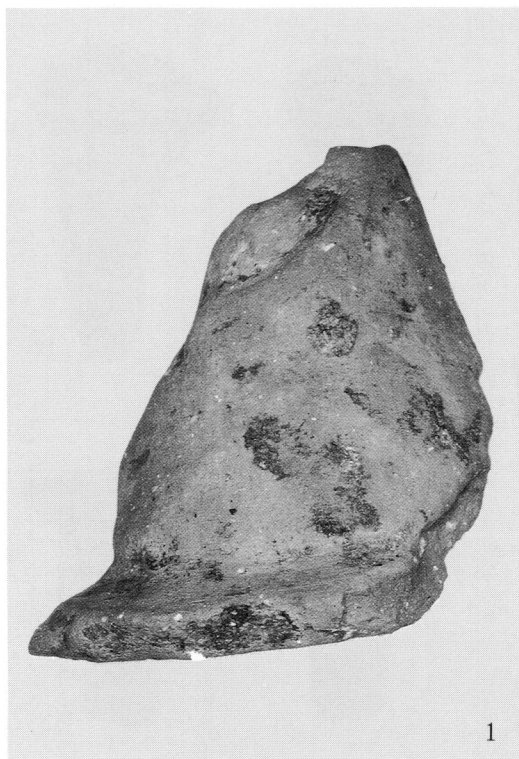
(2) 第I調査区下段部分溝群完掘状況(南から)



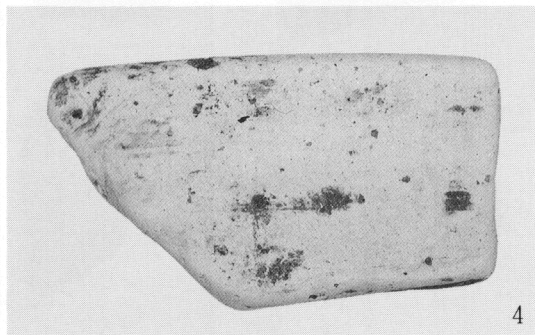
(3) 第I調査区下段部分柱穴群検出状況(西から)



(4) 第I調査区下段部分柱穴群完掘状況(西から)



(1) SX-01出土遺物



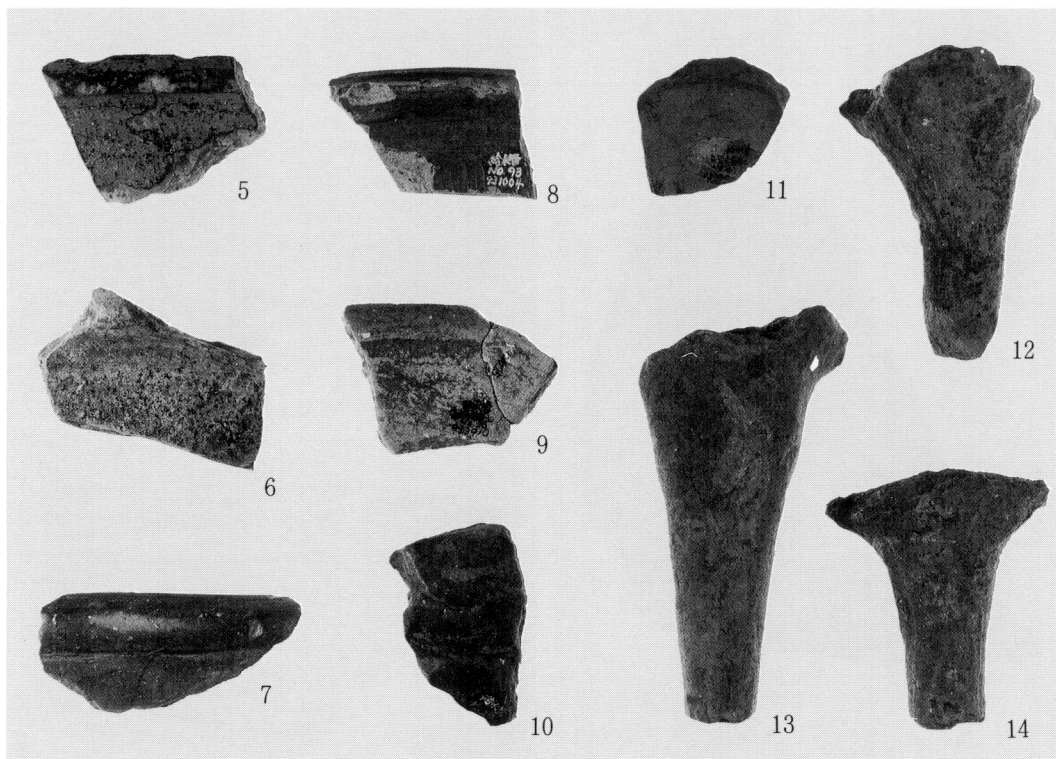
(2) Pit-04出土遺物(1)



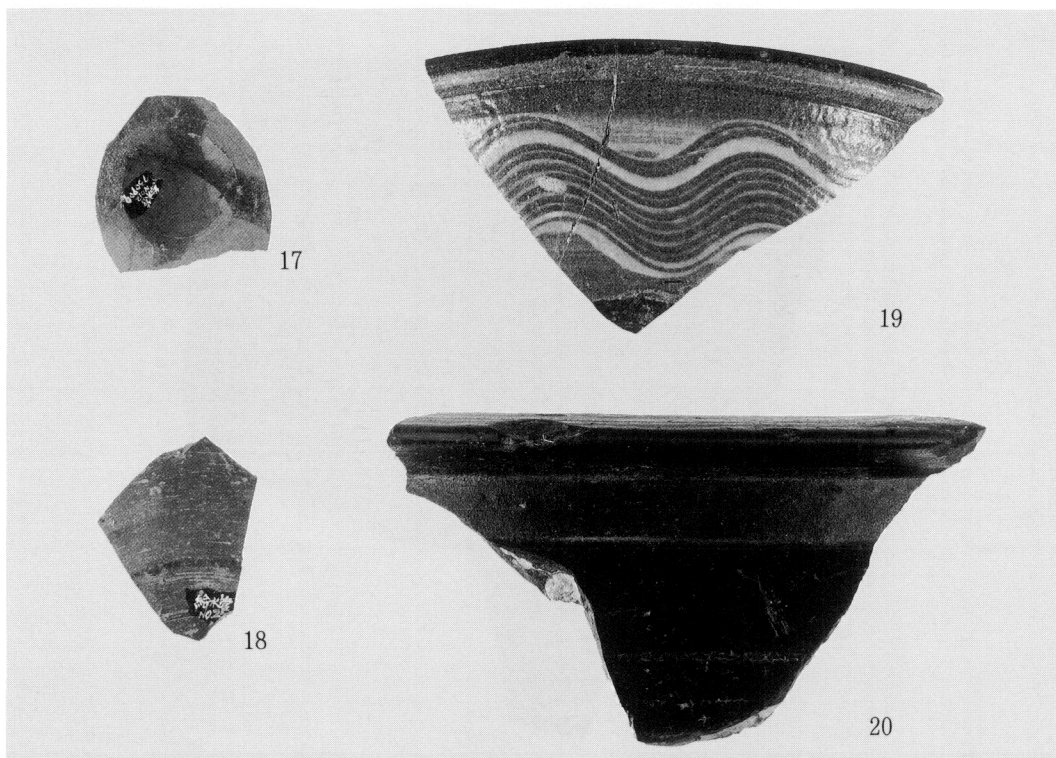
(3) Pit-04出土遺物(2)



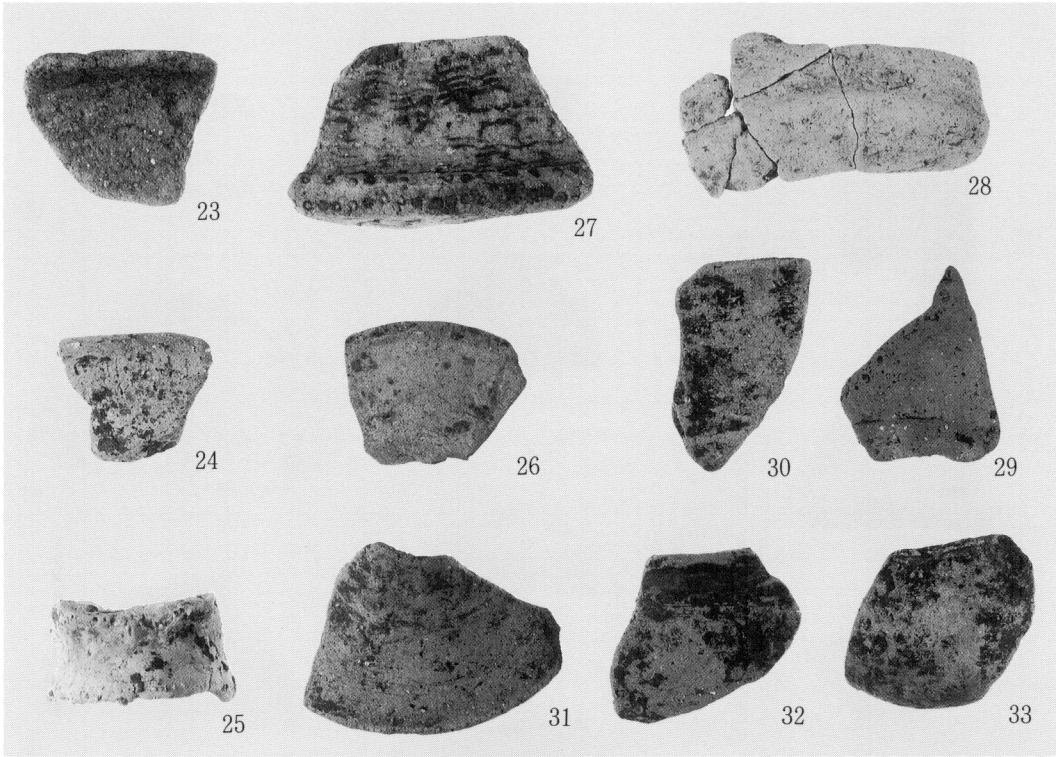
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査  
(7)



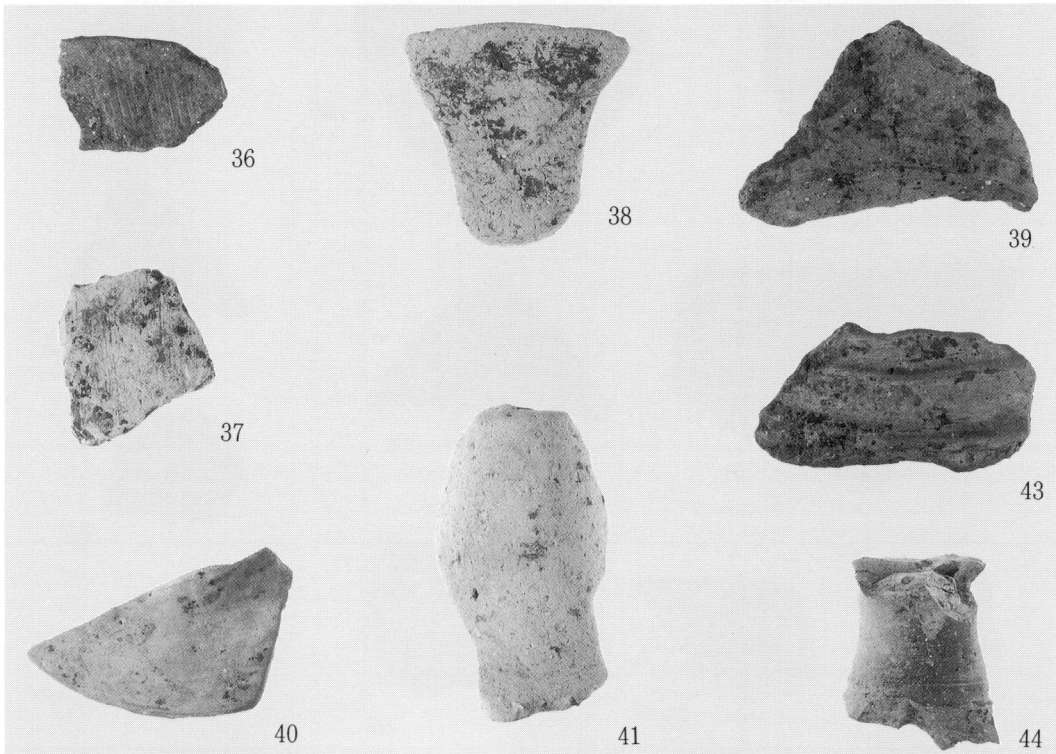
(1) 第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物



(2) 第I調査区上段部分遺物包含層出土遺物

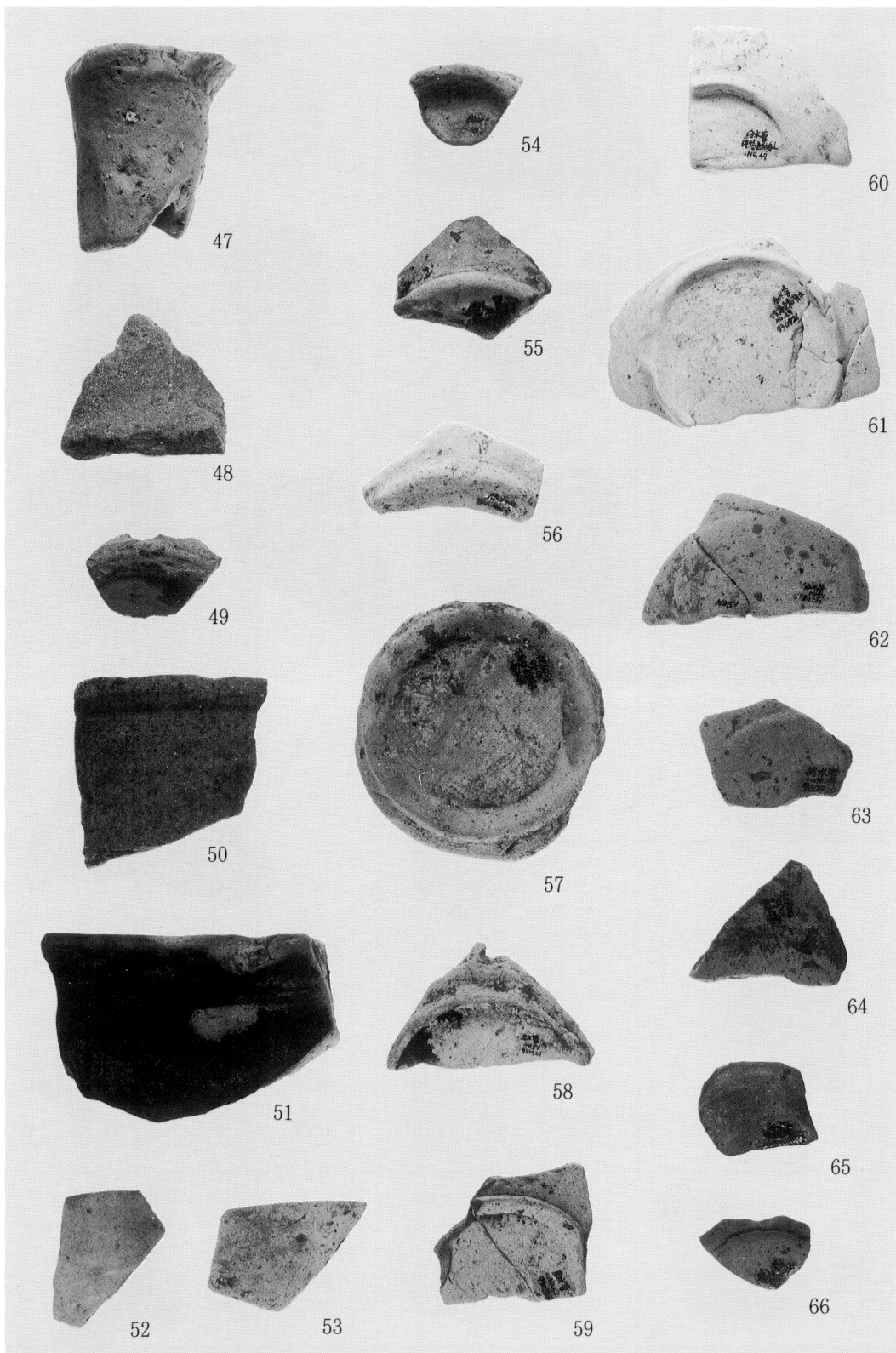


(1) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土遺物



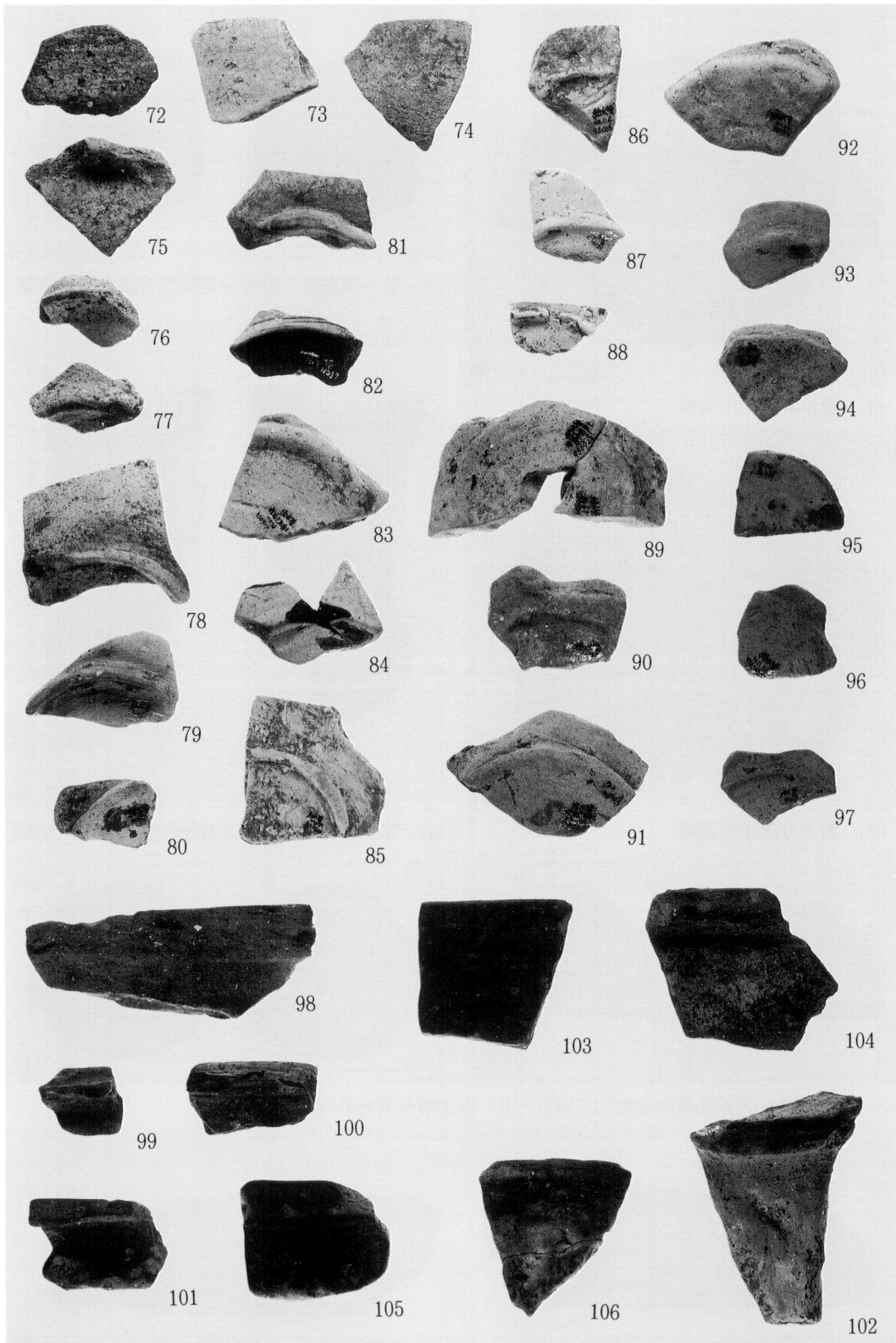
(2) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ'・Ⅱ'出土遺物

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査  
(9)



第 I 調査区下段部分遺物包含層 II 出土遺物

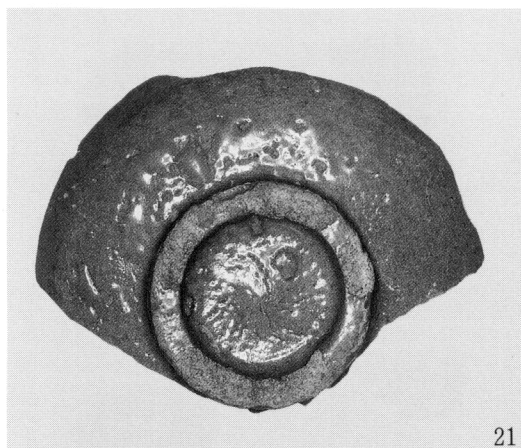
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査 (10)



第 I 調査区下段部分遺物包含層 I 出土遺物

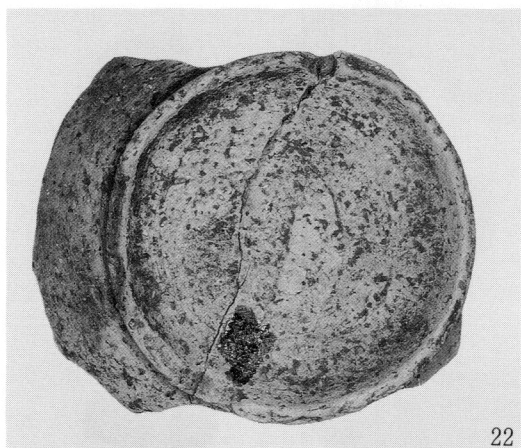
吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査

(11)



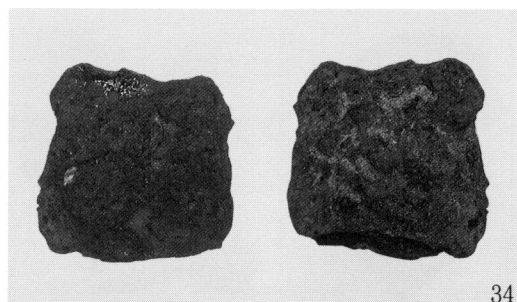
21

(1) 近世大溝出土陶器



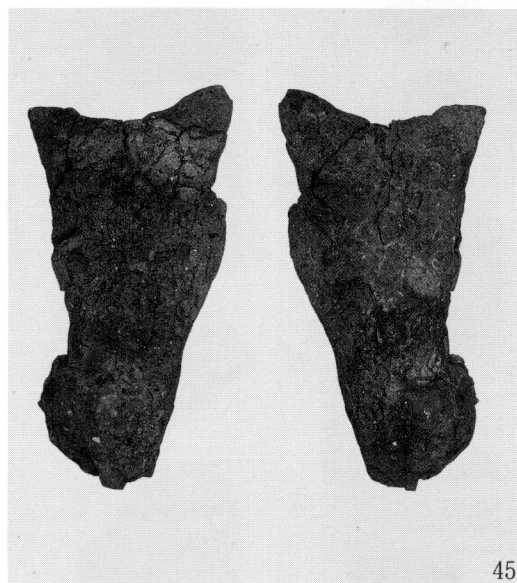
22

(2) 第2号溝出土遺物



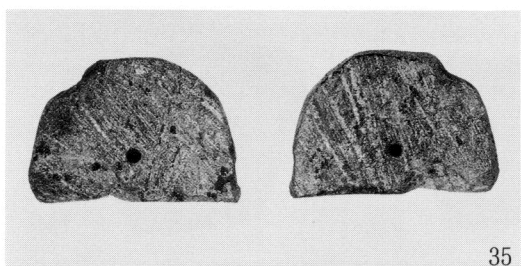
34

(3) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ出土鉄鏃



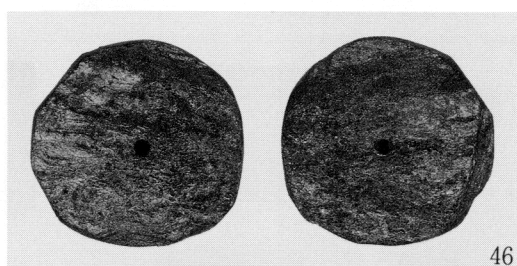
45

(4) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ'出土鉄鏃

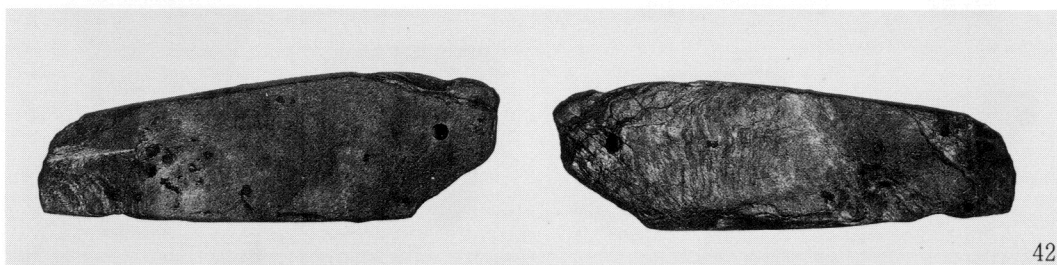


35

(5) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅲ・Ⅱ'出土滑石製有孔円盤

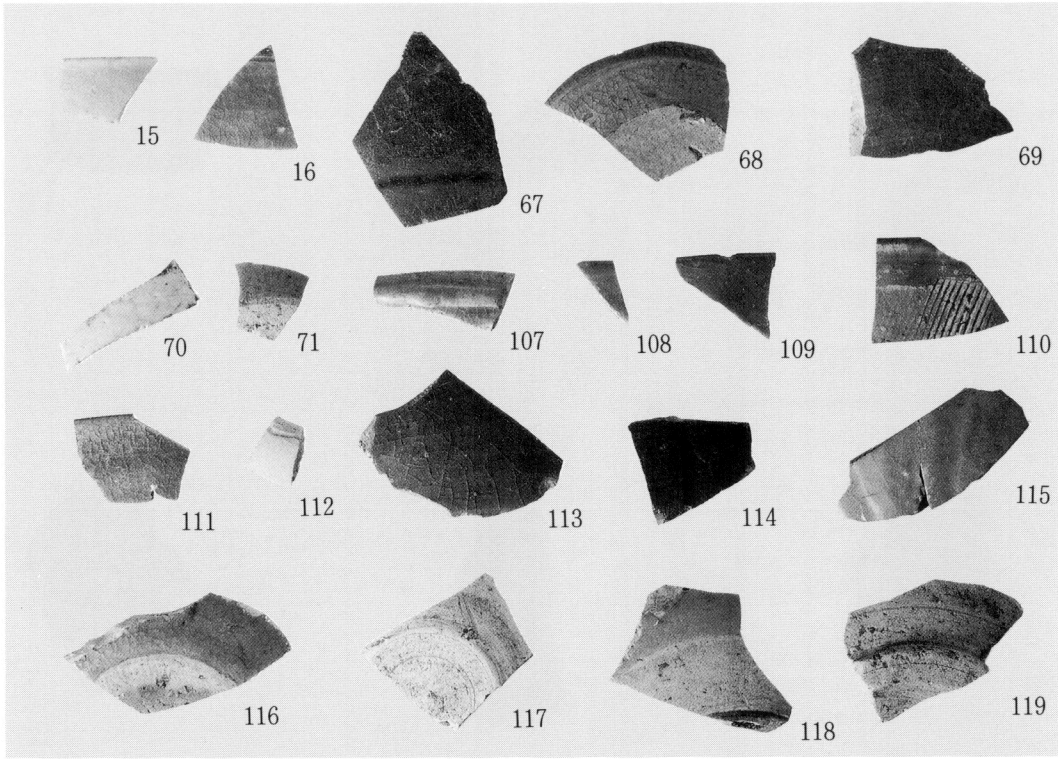


46

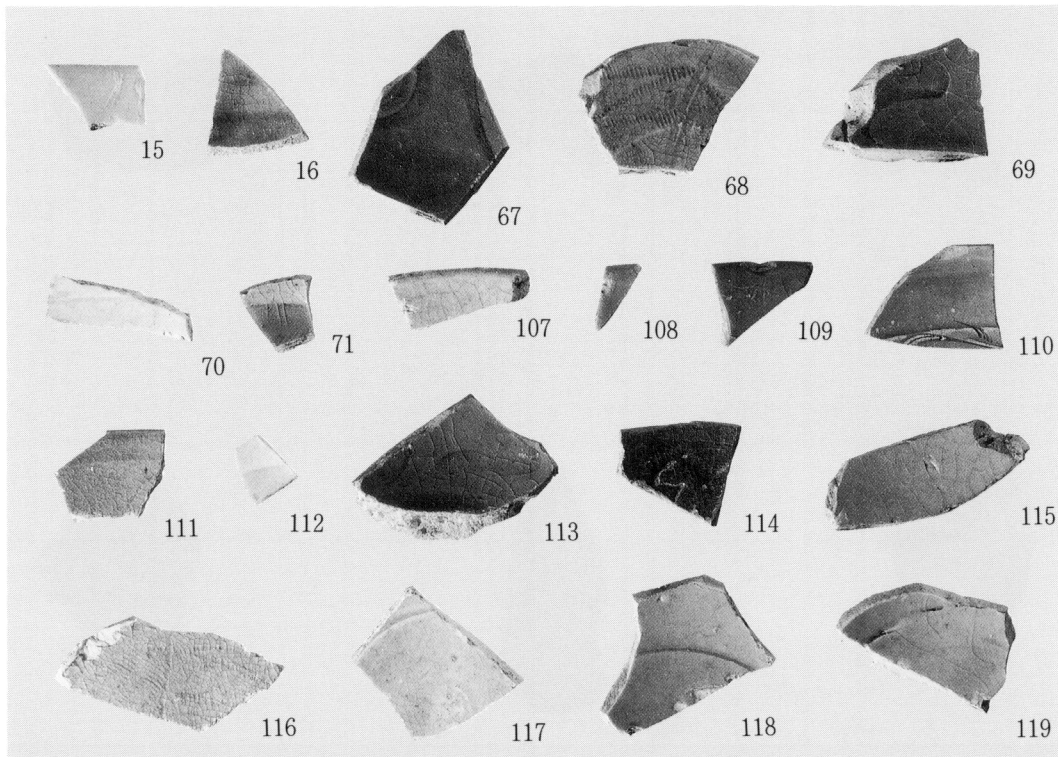


42

(6) 第I調査区下段部分遺物包含層Ⅱ'出土滑石製模造品鏃



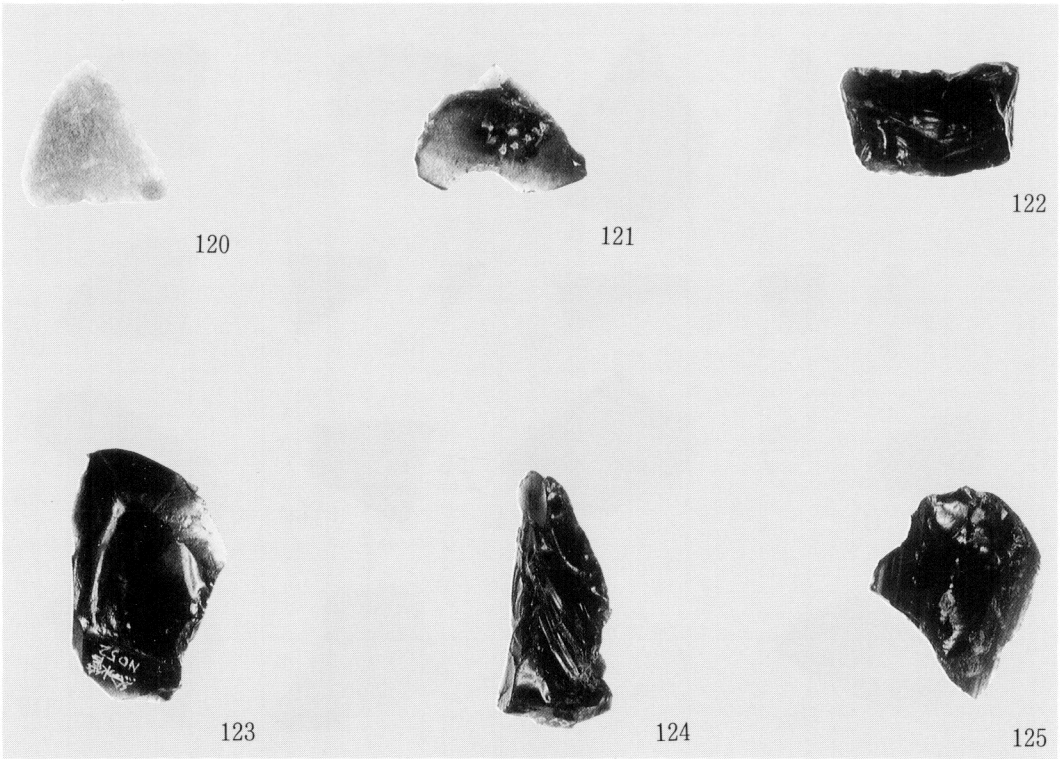
(表)



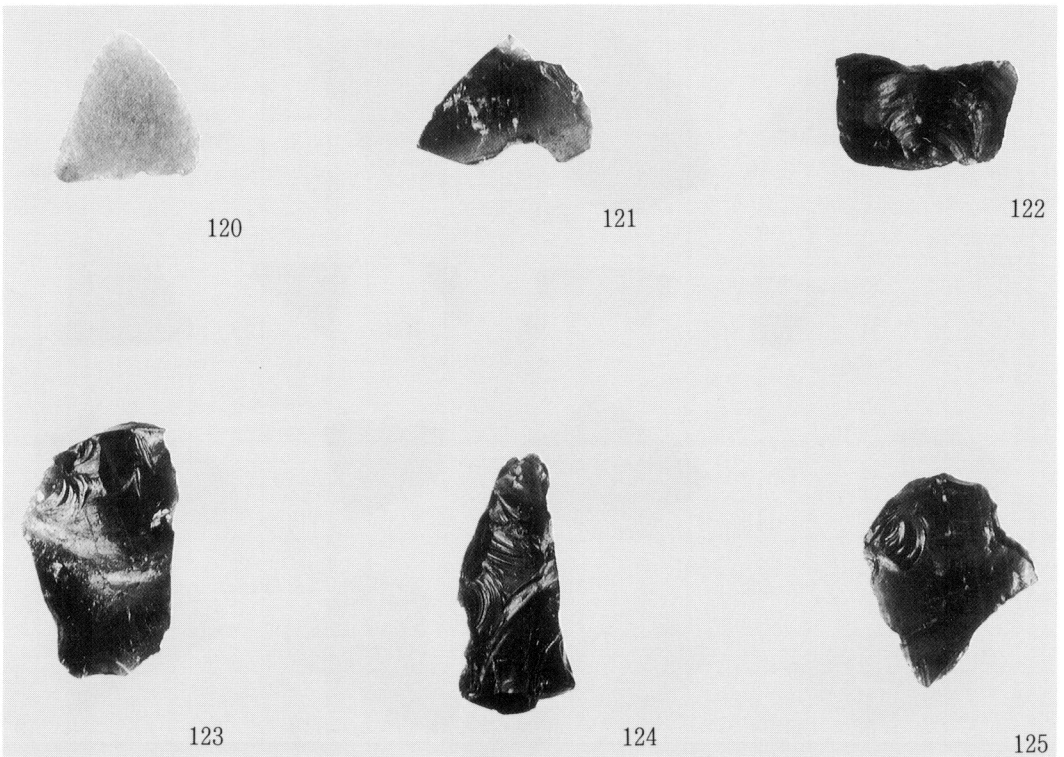
第I調査区遺物包含層出土青磁・白磁

(裏)

吉田構内本部裏給水管埋設に伴う発掘調査  
(13)



(表)



第 I 調査区遺物包含層出土石器

(裏)